

他方本願自殺志願者



井田隆代

今日は空がきれいだった。もう半分ほど沈んで見えなくなっている太陽が街と空を赤く染めあげている。足元からは部活中の吹奏楽部の演奏が聞こえる。うん、なかなか素敵だ。いい感じに僕の今の状況から気を逸らしてくれる。僕は今、学校の屋上にいる。転落防止柵の向こう側に立って暗くなっていく空を眺めている。下は向かない。怖いから。

靴下越しに屋上の縁に触れているのはつきりとわかって嫌になる。体を支えているといってもつま先はもう空中にあるのだと意識してしまつて冷汗が出る。

突然下から強い風が吹き上げてきて、情けない声を上げながら柵を握りしめた。といつても僕の腰の高さまでしかない頼りない柵なので、少しバランスを崩してとうとう下を見てしまった。

地面の遠さにゾツとして目がくらむ。揺れる視界の中で動くものが見えた気がして、恐怖を紛らわせようとそこへピントを合わせた。

僕がいるC棟の向かいのB棟、その非常階段の二階に女の子が立っていた。

おそらく目が合ったのだろう、と思う。少し距離がある上に彼女は日陰にいたので僕からはよくわからなかった。ただ彼女は僕が視線をやつてすぐに身をひるがえして校舎の中に入つていったので、僕が完全に見つかつてしまったというのはわかった。

彼女、先生を呼ぶつもりかもしれない。誰かが来る前に早くどうかしなくてはと思つているのに、体が恐怖で動かない。

さっきの突風のせいで自分が今いる場所が四階分の高さにあつて、もしも落ちたら間違ひなく死んでしまうであろうことが嫌と言うほど理解できてしまった。足が震える。どくりどくりと脈打つ自分の心臓の音が耳についた。

動こうにも動けず途方に暮れた時、「待って！」と屋上のドアが勢いよく開かれ、そう叫ばれた。振り向くと長い髪を振り乱した女の子が肩で息をしながらこちらを睨みつけていた。たぶん、さっき非常階段にいた子だ。この距離で顔を合わせてやつとその子が同級生だと気がついた。確か一組の河鹿……下の名前はわからない。中学のころ一度同じクラスになつたことがあるはずなのに、そのくらい僕の河鹿さんに対する印象は薄い。

それでも記憶の中にかすかにある河鹿さんは女の子の輪の中で笑つて相槌をうっているものばかりだ。こんな風に大きな声を出しているのも、誰かを睨みつけているのも初めて見た。あまりの剣幕にぼかんとしてしまう。

「あなたの自殺を止めたりなんてしない！ ただ死ぬ前に私に教えて」

そこまで言つて河鹿さんは咳き込んだ。確か文化部だった河鹿さんが向かいの校舎の二階からここまであんなにも早く辿りついたので。さぞかし無理をしたのだろう。まだ乱れている息を整えようと、深呼吸を繰り返す。最後に一度大きく息を吐くと、河鹿さんは僕の目を見て尋ねた。

「どうしてそんな勇気が出るの」

その顔はどこか苦しげで、その時僕は（ああ、河鹿さんは死にたいんだろうな）とほとんど直感でそう思った。

そんな彼女に、僕は答えてあげなくてはいけない。

「……勇氣なんてないよ。怖いからここにいて、怖いからここから動けなくなってるだけなんだ。これはただの無鉄砲だったなって、今になって後悔してる」

「そう、なんだ」

がっかりしたように肩を落とされて、申し訳ない気持ちになる。僕に河鹿さんが待ち望んでいるような答えは返せない。

「正直なところ僕はもう柵の向こう側に戻りたい。ごめんね、こんな意気地なしで」

「ううん、あなたは悪くない。勝手に期待した私が悪いんだよ。ごめんなさい」

河鹿さんはゆっくりと首を横に振ると、気を取り直したように僕を見た。

「正直しがつかりしたけど、私本物の自殺志願者なんて初めて見たから聞きたいことはまだまだあるの！ ちょっととお話、いいかな？」

瞳をキラキラさせながらこちらへ迫って来る河鹿さんに、僕は顔を引きつらせながら答えた。

「あの、とりあえず僕を柵の内側に引つ張り込んでくれないかな。情けないけど、怖くてここから一歩も動けないんだ」

柵の外側で質問に答え続けるなんて拷問だ。

河鹿さんに引つ張られ、僕は無事愛すべき柵の内側へと帰還した。ただその際無様に背中や頭を打ち付けたのでしばらく僕は痛みに悶えていた。河鹿さんもそんな僕に気を遣ったつもりか僕の脱いで

あったスリッパを差し出すと、あとは黙って憐みの目を向けていた。馬鹿にするような言葉でもいいから何か話しかけられる方がマシだった。

僕の足の震えが治まると、それをみはからったように河鹿さんが口を開いた。

「四組の馬屋原くん、だよ。たいして悩みなんてなさそうに見えたけど、そもそもどうして死のうなんて考えたの？」

「えっ？ あー、うん、あの……ちょっとね」

「……まあ、そうだよ。私たち顔と名前は知っているけど、まともに話すのはたぶんこれが始めてだし。そんな相手に簡単に理由なんて教えてくれないよね」

河鹿さんは少し悲しそうにそう言うと、顔を伏せてしまった。質問をはぐらかした罪悪感に耐えきれなくなつて沈黙を破つたのは僕だった。

「あの、僕からも一つ聞いていいかな」

「なに？」

「どうして河鹿さんはそんなこと知りたいの？」

河鹿さんはその言葉を聞いてうろたえたように視線をさまよわせたけれど、最後にはまた僕の目をまっすぐに見つめてこう言った。

「じゃあ、まずは私の話を聞いてくれる？」

僕が頷くのを確認して、河鹿さんは口を開いた。

「実は私もね、死にたいの。生きていたくないの。でも自殺するくらいの勇氣はなくて、誰か私を殺

してくれないかなって思いながら生きてるの。だから私、どうやって死ぬ覚悟を固めたのか聞きたかった」

「河鹿さんに死にたいと思うくらい辛いことなんてあったの？」

「別にいじめられているわけでも、家庭環境に問題があるわけでもないの。ただ、私は未来が怖い」
未来が怖い。僕は口の中で繰り返した。未来だとか将来といった言葉は、希望や光というような明るいものを連想する言葉だと思っていた。

「小学生のころとか未来の自分に手紙を書いたりしたでしょ？ みんな自分はどんな大人になつてるだろうって楽しみに書いてたけど、私は途方に暮れた。大人になつてる自分ってものがこれっぽっちも想像できなかった。それがたぶん一番最初」

そう言って河鹿さんは下を向いた。自分の考えを整理してようにも、僕の視線から逃げたようにも見えた。

「みんな簡単に夢を語るけれど、私には将来どうなりたいたいか、何かになりたいとか、そういう夢なんてない。身の丈にあった生活をして、ホームレスにならなきゃ万々歳。それにこのままレールから外れなければ、高校に通って受験して大学いってバイトして就活して就職して、うまくいけば結婚して子供ができて、その子供が子供産んでおばあちゃんになって……そんなありきたりの未来を想像したらぞっとして死にたくなった」

やけに低く、暗い声で告げられた最後の一言は実感を持って僕に迫った。なんだか胸がどきりとして、反射的に言葉を返していた。

「普通の人はそれを幸せなことだと思っくんじゃないの」

「そうだね、人によってはさっきの未来予想を幸せと呼ぶのかもしれない。でも同じような日々を何回も何回も何回もくりかえして、楽しいことばかりじゃなくて辛いことだっただけってたくさん経験する。そんな毎日に一七年目でもううんざりしてるの。疲れたの」

河鹿さんは吐き捨てるようにそう言った。誰かはそれを逃げだとか、甘えだとかいうかもしれない。僕の冷静な部分だっけそう言った。でも河鹿さんのぎゅっと握りしめられたこぶしが目に入っで、そんなことは言えなかった。

「……これ以上続かなくていいよ、人生なんて。長生きなんてしたくない。早く私の人生が終わればいい」

打って変わって力なくつぶやかれた言葉はなげやりで、それなのに祈りのようだった。私はこんなにも死にたいと思ってるんだから、早くそういう運命をくださいというどこか横暴で、でも本人にとっては切実な祈り。

「でも死ねないんだね」

そんなに死にたいのなら自分で死ねばいいじゃないか、という含みを感じたのだろう。河鹿さんはぐっと言葉を詰まらせた。

「……そうよ。死ぬ勇気なんてないの。手首を切るなんて痛そうだし、もし死ねなかったら傷跡が残るでしょ？ その後の人生何をして他人から（ああ、この人自殺しようとしたことがあるんだなあ）って思われ続けるじゃない。そんなの嫌よ恥ずかしい」

「じゃあ他の方法は？ いろいろあるでしょ、飛び降りとか」

「……人がしようとしたことを否定するのは嫌なんだけど、飛び降りとか飛び込みは絶対したくないわ。だっていろいろ飛び散るでしょ？ 清掃員とか警察の人に申し訳ない」

「いや死んだ後の迷惑とか考えなくて良くない？」

「そんなの非常識じゃない？」

一言物申したい衝動をぐっと呑みこんだ。河鹿さんに常識を語られたくない。僕が言うのもなんだけど。

「特に飛び込み自殺はそれによって電車が遅れるからたくさんの人に迷惑がかかるでしょ。電車の遅れに対してめちゃくちゃ怒ってる人見たことあるし、死んでから人の恨みをかうような方法はちよつと……」

変なところで律儀な人だな……。僕は河鹿さんのちよつとずれた自殺観がだんだん楽しくなってきた、思いつく限りの自殺方法を挙げていくことにした。

「じゃあ首つりは？」

「窒息死した死体っていろんなものを体から垂れ流して最高に汚いって聞くから嫌。そんな姿、家族はもとより誰にも見られたくない」

「睡眠薬や毒薬を使うのは？」

「入手が難しくない？ お店で買おうとしても未成年に売ってもらえる量って少ないし、致死量まで集めるのにすごく時間かかりそう。集められたとしても最近の薬って自殺を警戒して効果が薄いか

ら、そのぶんたくさん飲まなきゃいけないでしょ？ 私錠剤飲むの苦手だし、途中でたぶん吐くから無理」

「一酸化炭素中毒」

「まず部屋を密閉する必要があるけれど、家族と一緒に住んでる高校生はどこで死んでも家族の迷惑になるわ。家族を巻き込む可能性だってあるし。それは絶対に避けなきゃ」

「手首にこだわらずお腹とか首とかを切っちゃおう」

「介錯のない切腹って死ぬまでどれくらいかかるか知ってる？ 長くて数日苦しみ続けることもあるの。首を切るのだって医学知識のないか弱い女子高生が切るのよ？ 即死なんて無理だわ。死の間際まで痛い痛いって思い続けたくないから嫌」

「樹海に入ろう」

「樹海って……餓死？ うわ想像しただけで嫌だわ死ぬまでに時間がかかりすぎでしょ。それに死体って発見してもらえるの？ 供養はされたいんだけど」

あれも嫌、これも嫌。流れるように否定の言葉を紡ぐ河鹿さんに負けじと僕も自殺方法を考える。あと他にどんなものがあつただろうか。

「ついでに言うけど焼死、水死は死ぬまでがすごく辛そうだから嫌。この辺りはほとんど雪も降らないから凍死もなしね。できる限り痛くなくて手間のかからない安らかな死に方がいい」

駄目だもう自殺方法が思い浮かばないうえにこの人理想の自殺ハードルが高すぎる！

「……そんなんじゃ自殺なんてできないね」

わがままなお姫様かと言いたくなるような否定の連続に、僕はそれでも自殺志願者かと呆れながら笑ってしまった。

「そうよ、意気地なしの上にめんどくさがりで理想が高いから自分では死ねないの。わかってもらえたかしら」

僕の呆れなんてものともせず、河鹿さんは誇らしげに言った。胸を張るところじゃないと思うんだけど。苦笑いを浮かべるしかできない僕に、河鹿さんは続ける。

「だから、誰かに殺してほしいの」

友達と笑いあっている時よりも輝いているような、とびきりの笑顔だった。そして物騒なことを言っているのにとっても静かで、落ち着いた声をしていた。

「飲酒運転の車に突っ込まれるとか、通り魔に刺されるとか、殺し方は何でもいい。どんな理由で殺されたってかまわない。ただ私を殺してくればそれでいい」

一般的な考えと明らかにかけ離れた内容を語るのに、それが正しいあり方だというように穏やかに語る。そのギャップに僕はとても戸惑って、何も言えなくなっていた。

「自分で死ぬ行動を起こさないのはもちろん痛いのが苦しいのが嫌っていうのもある。でも一番の理由は、残された人が辛いだろうから。自殺だとき、親しい人は自分に何かできることはなかったのか、ってどうしても後悔しちゃうじゃない？ 下手をすると一生、そのことに縛られる。どうすればよかったのかって返ってこない返事を待ち続けて、行き場のない感情を持って余すのはきつと、苦しむ。だけど、もし事故なり殺人なりで人に殺されれば、残された人は犯人に恨みを、嘆きをぶつけることができる。感情のはけ口ができる。自分を責めなくてすむ」

噛んで含めるようにゆっくりと、河鹿さんは語った。こちらを向いているのに、焦点は僕に合っていない。視線の先に大事な人を見ていて、その人がどう反応するかを想像しているようだった。

「ね、残された人の苦しみが一番軽そうで、私は家族や友達に醜くて歪んだ自殺願望を知られずにする。私を殺しちゃった人が罪に問われるのはまあ、かわいそうだけど諦めてもらうとして……なかなか悪くない考えだと思わない？」

うん、と一度頷くと、河鹿さんはこれが最適解だと言いたげに自信たっぷりな笑った。さっきも思ったけどこの人は変なところ律義で、常識的で、周囲に気を遣う。だけどその中心にあるものは、結局のところ自分だ。僕は河鹿さんに問いかけた。

「基本的なこと聞いていい？ 自殺だろうが、事故だろうが、殺人だろうが、河鹿さんが死んだら家族や友達を悲しむよね」

「……そうだね。家族や友達を悲しむと思う。とっても優しい人たちだから。私、とっても周囲に恵まれてるって思うし、みんなが大好きだよ。心の底から」

河鹿さんは目を伏せて、左手を胸に置いた。心臓の上の手は、あふれる思いを抑えようとしているようにも、大切な思い出に触れているようでもあった。

「でもね、人の悲しみなんか知らない。たった一度の人生だもん。私は自分の好きなように生きて、死ぬ」

さっきまでとは一転した、睨み付けるような鋭い視線が僕を射抜いた。射抜かれて、しまった。今

まで確固たる自分の主張というものもなく、流されて生きてきたような僕にとって、内容はどうかあれその決意が、強い意思が、眩しく映った。

再び僕たちの間に会話がなくなつて、ようやくグラウンドが静かになつていたことに気がついた。最終下校時刻が迫っているのです、部活動をしていた人たちが帰り支度をしているのだろう。もうすぐ下校のチャイムが鳴る。そうなれば屋上のドアも鍵が閉められる。その前に帰らなければ。ちらりと階下に目をやった僕の反応で、河鹿さんも同じことを考えたのだろう。「帰らなくちゃ」とつぶやいた。このままここで「それじゃあ」と別れたら、僕らの繋がりは消えるかもしれない。お互いにクラスも違えば教室のある棟だつて違う。委員会も部活も違うし、交友関係だつて被っていない。だからお互いに話しかけさえしなければ、僕たちの接点はなくなる。まるで今日交わした言葉なんてなかったみたいに、日常に戻る。僕はそうなるかもしれないと思うと少し寂しかった。河鹿さんともっと、話してみたい。

「ねえ、また話したいんだけど。……いい？」

だから河鹿さんが不安げな顔でこう切り出してくれたとき、僕は嬉しくて、一も二もなく答えていた。「もちろんいいよ。屋上以外でならね」

翌日の放課後、僕は昨日河鹿さんに指定されたとおりに一人で図書室に来ていた。テスト期間でもないので人がまばらな図書室を見渡すと、中でも人気のない図鑑コーナーで河鹿さんが控えめに手招きしているのが見えた。

近寄つて話しかけようと口を開いた途端、河鹿さんが静かに、というジェスチャーをした。口を閉じた僕を見て河鹿さんは満足そうにうなずくと、耳元に顔を寄せて「三分後に出てきてね」とささやいた。

河鹿さんはそれだけ言うた僕何か言う間もなく図書室から出て行った。僕は疑問に思いながら図書室の時計を眺めて三分を過ぎた。

三分きっかり経つたことを確認して、司書のおばさんに会釈をして図書室を出た。河鹿さんはどこにいるのかと左右を見渡すと、少し離れた場所の壁に寄りかかつて心なし不機嫌そうに僕を見ていた。

「遅い」

「えっ、僕言われたとおりにきっちり三分待ったんだけど」

「自分で設定しておいてなんだけど、三分って思ったより長かったのよ。まあそれは次回に活かすとして、人のいない今のうちに移動しましょう」

そう言うって河鹿さんは僕の前に立って歩き出した。その背に僕は声をかける。

「ねえ、なんでこんな徹底的に人目を避けるの？」

「だって今まで私たち全然接点なんてなくて、仲良くなる理由がないでしょ。だからもし話してるのを見られたら『何がきっかけで仲良くなったの?』とか聞かれそうじゃない。そのとき『いやー屋上で自殺しようとした馬屋原くんを偶然見つけて』なんて言えるわけないし」

それはそうだ。僕だつて言えるはずもない。

「あとこの方がスパイごっこみたいで楽しいじゃない」

「河鹿さん絶対そっちがメインでしょ」

どうりで動きがいちいち芝居がかつてると思った！ 僕たち二人のことを真剣に考えてるんだなって感心して損した。

話しながら河鹿さんはどんどん廊下の奥へ進んでいく。僕たちが通う学校の校舎は、上から見ると漢字の「王」に似た形をしている。三つの教室棟の真ん中を渡り廊下がつないでいる形だ。一番北側からA棟、B棟、C棟と呼ばれており、A棟には中学生、B棟には高校一年と二年の一〜三組、C棟には高校二年の四〜六組と三年の教室がある。真ん中を貫いている渡り廊下から左の西側が普段過ごしている教室で、右の東側が音楽室や調理室などの特別教室が並んでいる。

僕たちがさっきまでいた図書室はB棟二階の渡り廊下のそばに位置している。河鹿さんは特別教室のある東側にずんずん進んで行き、一番奥の会議室前まで来てやっと足を止めた。

「ここが目的地なの？ ここって先生たちが会議に使ってる部屋だし、見つかったらやばくない？」
「違うわ。目的地はここじゃなくて、その先」

河鹿さんが指し示したのは突き当たりの壁に設置してある非常階段への扉だった。

示されてやっと僕はその存在を思い出した。もちろん非常階段というものが存在していることはわかっていたが、入学して今まで一度も利用したことがない。避難訓練でも使った記憶はないし、誰かが使っている姿を見かけたこともない。学校生活を送る上で必要としない場所だから、存在しているけど目に入らない、ある意味透明な存在になっていたのだ。

河鹿さんは慣れた手つきで内側の鍵を開けて非常階段へと出た。僕もそれに続くと、河鹿さんは廊

下を確認してから音を立てないようにそつと扉を閉めた。

校舎の外についている非常階段はコンクリート製で、手すりも兼ねた壁が僕の腰のあたりまであった。座ってしまえば校舎の内からも外からも見えないだろう。外とはいえ、最上階である四階に登らなければ階段が雨や日差しをある程度遮ってくれる。まあ所詮ある程度だし、たいして掃除もされていないのか隅の方には苔が生えていたり、カラカラに乾いた落ち葉があったりする。

「いつもここで暇つぶししてるの？」

階段にうすく積もっているほこりや砂を見つめながら聞くと「暇つぶしに来てるわけじゃないわよ、失礼ね」と返事が返ってきた。

「なんとなく人に会いたくないときとか、落ち着いて考え事をしたいときに来るの。ここ、めったに誰も来ないから」

非常階段は僕ら学生が出入りする正門やグラウンドとは逆方向の裏門の側に位置している。確かに普通の生徒ならほとんどこの辺りにくることはないだろう。

「掃除されていないみたいでちょっと汚いんだけど、踊り場くらいなら私がたまに掃いてるし大丈夫よ」
河鹿さんはためらいなく踊り場に座ると、足を階段の方に投げ出した。僕はちょっと河鹿さんのスカート汚れを気にしながら、隣に腰かけた。座ってようやく非常階段からC棟の屋上が見えることと、河鹿さんが昨日ここにいたことに気がついた。

昨日の僕に「明日には非常階段で河鹿さんと話してるよ」なんて言っても絶対信じてもらえないだろうな。ほんの一日前のことなのに妙に感慨深く思いながら河鹿さんを見ると、視線を受けた河鹿さ

んが「それで昨日の話の続きなんだけど」と口を開いた。

「伝わりにくかったかな、と思つてわかりやすい例え話を考えてきました」

「それはどうも？」

昨日も思つたけど、河鹿さんつて妙なところで律義というか、気を遣つてくれるというか。でもこれは僕のためというよりも、自分の考えを理解してほしいって気持ちからなんだろうなと思ひながら話の続きを待つ。

「馬屋原くんはゲーム好き？」

「まあ、人並み程度にはするよ」

「私ゲームは攻略サイト見ながら効率よく最短時間でプレイする派なのね？ RPGで予想もしてなかった場所でトラップにかかったり、イベントを取り逃したままエンディングにいっちゃったり、そういうのが嫌なの。周回プレイが楽しいってゲームもあるけど、何回も同じ話をくりかえすのが苦痛なの。だからだいたい一回プレイしたらそれでおしまいなんだよね。それでさ、もし人生がゲームだとしたらどこにトラップがあるかわからない一本道をひたすら進んでるようなものでしょう？ 投げ出したくなるくらい不安で嫌いだわ」

僕とはほとんど真反対のプレイスタイルだ。時間がかかっても、イベントを取り逃しても僕は自分の力でゴールまで辿りつきたい。そもそもせっかく楽しんでいるゲームのネタバレを踏んでしまうかもしれないから、攻略サイトは覗かない。

ああでも人生にはネタバレはないな。そういえばセーブポイントもない。どちらかという僕は

そっちの方が嫌だ。

小学生のとき、フリーマーケットでゲームボーイとポケットモンスター銀のソフトがセットになって安く売っていたことがあった。僕はそれを掘り出し物だと思つて買つてもらったのだが、実はセーブ機能が壊れていた。きちんとセーブをして電源を切つても、再び付けたときには「さいしよからはじめる」しか選べなくなっていた。消してすぐつけると続きから始めることができるのだが、ご飯やお風呂から戻つてくるともう駄目だった。

それならば、と電源を消さないでいることにしたのだが、単三電池二本で動くゲームボーイはどうしても限界というものがあつた。ぶつ通しで使うとだいたい六時間で電池が切れた。値段のものは取れたと思うのもう良いのだけれど、やりたいところややり直したいところからスタートできないのはかなりのストレスだった。

確かにゲームで例えると人生つて投げ出したくなるくらいクソゲーだなあ。

理解しやすくして感心もしたけど、河鹿さんが昨日の夜、一人でこの例えを考えていたのだと想像するとなんだかほっこりした。僕も昨日河鹿さんと別れてからずっと考えていた。そして僕の考えは決まった。

「あのね、言うタイミングを逃してただけど、僕も河鹿さんと同じようなことを考えてた」

「同じようなことつて……」

「将来が不安で、めんどくさくなって、死んだら何も考えなくていいから楽かなつて思つて、昨日屋上に上がった。そしたら河鹿さんがやつて来た」

「……言ってくれば良かったのに」

「河鹿さんが『どうして死ぬ勇気が出せるの?』って聞いたでしょ? それできっと河鹿さんも死にたいんだなってわかって、だけどいじめとか家庭環境とか不治の病とか深刻な理由があって死にたいって思ってたらどうしようかと思った。そんな人になりたい理由は無いけど死にたいです、なんて言えないじゃん」

河鹿さんは「馬屋原くんなりに気を遣ってくれてたんだ」と驚いたようにつぶやいた。気を遣ったのももちろんだが、河鹿さんが自殺というものに対してどういう立ち位置にいるのかがわからなくて、トラブルを起こすと面倒だとも思ったからだ。リストカットとかくりかえしているような子だったら即逃げようと思っていたなんて、口が裂けても言えない。

「だから昨日はびっくりした。河鹿さんが僕と同じような意見を持ってたことも、それを堂々と話して、人に殺されたいって発想に至ったことも」

一度つばを飲みこんで、僕は決意して「だからね」と続ける。

「僕は君の考え方を全面的に支持します。それで、もし自殺とか他殺のいい方法が見つかったら僕にも教えてね」

僕の心情としては一世一代の告白、くらい思い切ったものだったのだけど、当の河鹿さんはぼかんとした顔をしていた。見つめても返事は返ってこなくて、「何か言ってるよ」とせっついてようやく河鹿さんははっとして口を開いた。

「ご、ごめん! まさかそんな言葉を返してもらえるとと思ってなくて、ちょっとびっくりしちゃっ

た。……私の考えを理解してくれる人に初めて会ったから」

河鹿さんの手はスカートのプリーツをなぞったり、自分の髪の毛を触ったりとせわしない。こんなあからさまに照れてますみたいな反応をされると、どう言葉をかければ良いのかわからない。河鹿さんの両手が元通り膝の上に落ち着いたころ、やっと河鹿さんは僕に話しかけた。

「ねえ、馬屋原くん。私たち同盟でも作りましょうか」

「同盟? 何の?」

「何ってもちろん、死にたいけど死ぬ勇気がなくて死ねなくてあわよくば誰かに殺してほしい人同盟」

「長い上に語呂わる……」

「じゃあそうだね……他力本願自殺志願者同盟?」

まだまだ長いけど、だいぶマシになった。それに他力本願ってところが結構気に入った。

「他力本願って響きが、情けなくてめんどくさがりな私たちに最高に合ってると思わない?」

心を読まれたのかと思うくらい同じことを考えていて、思わず「僕も今、そう思ってた」と言っていた。僕たち思っていたより気が合うのかもしれない。

「ああ、でもあなたと二人で同盟組むの心底嫌だわ」

「えっ、ひどくない?」

「いえ、あなたの性格がどうこうって話じゃなくて。あなたは『馬』屋原で、私は河『鹿』でしょう? 二人でいると馬鹿になっちゃう」

河鹿さんがくすくす笑いながら言った冗談に力がぬける。

「僕たちって馬鹿だし、あながち間違っていないんじゃない？」

僕が笑いながら言うと「それもそうね」と河鹿さんも笑った。僕たちはこうしてたった二人の同盟を結成した。

「第一回他力本願自殺志願者同盟定例会を開催します！ どんどんばふばふ！」

「テンションがおかしい」

「さて、記念すべき第一回の議題はこちら！ 『一番苦しくない自殺方法は何か』です！」

いや、こちらって言われても河鹿さんが示したところ何も無いんですけど。「こちら！」って言った後に紙をめくるような動作をしたのは何気分なの？ 笑点？

言いたいことはありすぎるくらいだったけど、記念すべき第一回から水を差すのも気が引けて言葉を呑みこむ。

「まあずっとこんなテンションでやってたら疲れるので元に戻ります。さて、私たちの目標は他人に殺してもらうことだけど、それってハードルが高いじゃない？ 私たちでもできそうな自殺方法を探すことを諦めちゃだめだと思うのよね。というわけで苦しくない自殺法はやっぱり眠ってるうちに死んじゃうことだと思っただけど、馬屋原はどう思う？」

いやすぐ戻るんかい！ 河鹿さんはさっきまでのテンションが嘘のようにすとんと真面目な顔になった。切り替え早くない？ 僕河鹿さんのスピードについていけないんだけど。思わず眉間にしわが寄ったが、つつこんだら負けな気がして僕はきわめてフラットに質問に答えた。

「……そうだね、僕も意識のないうちに死んじゃうのが一番楽そうだと思う」

そんな僕の態度に河鹿さんは「意見が合ったみたいで嬉しいわ」と棒読みで答えた。つまらなさそうな顔をめてくれる？

「眠っているうちになると睡眠薬との合わせ技がいんじゃないかな。前漫画で睡眠薬飲ませた人をガムテープで浴槽に固定して水を出し続けて溺死させるって話があったんだけど、これを自殺に応用したら結構いい線いくんじゃないかなって思う。睡眠薬を飲んで浴槽で寝ているところに、お風呂のタイマー機能とかを使って水を出すんだ」

「なるほど、眠っているうちの水死ね。痛みもなさそうだし、わりといいかなと思いました。しかし、もしそれで死ねたとしてそんな珍妙な死体を家族に発見されるのよ？ 事故なのか自殺なのか、下手したら殺人じゃないかとも思われてほぼ確実に捜査がされるでしょうね」

いきなり言われて絞り出したにしては良いアイデアじゃないかと思ったのだが、言われてみると確かに死後のことはあまり考えていなかった。もし警察の手が入ってパソコンの検索履歴とか私的なことを調べられることになれば、死してなお辱めを受けることになってしまう。

「それにやっぱ睡眠薬が効き始めるまでの時間と水がたまるまでの時間が重要よね。実行までに練習が必要だし、家族と一緒に住んでいる以上あまり練習が多いと感づかれる可能性もあるわね。もうちょっと詰めて出直してきて」

てっきりもう少しふざけたことを言ってくるかと身構えていたのだが、真つ当なため出しをされて逆に驚いた。

自殺方法の検討はすぐ真剣にやるんだな、と感心していたら視線を感じた。隣に座る河鹿さんが質問してほしげにちらちらと視線を送っていた。これはたぶん自分にも「どんな自殺が良いと思う？」って聞いてほしいんだろう。なんとなく河鹿さんの性格が掴めてきたし、思ったより面倒な人だと言ったこともわかってきた。

「そういう河鹿さんはどういうのがいいの？」

聞かないのかわいそうで、河鹿さんに話を振った。僕の質問に河鹿さんは良くぞ聞いてくださいました、みたいな顔をして話し出した。

「ネットで見たんだけど、密室にユリの花を敷きつめて一晩寝るとそのまま目覚めないらしいのよね。私これが一番安らかさうだと思おう」

白雪姫のように、ガラスの棺の中でユリに囲まれて眠る河鹿さんが想像できた。確かに女の子が好きそうな最期ではある。だけどあまりにも現実味がないんじゃないだろうか。

「きれいだし安らかさうだけど、それってどれくらいユリが必要なの？」

「えっと、詳しいことは書いてなかったけど、たぶん部屋を隙間なく埋め尽くすくらいの量が必要だと思う」

「……それってめちゃくちゃお金かららない？ ユリの花って一本いくらするのかわかんないけど、花って基本高いよね？ それにそんな大量のユリを買ったらまず間違いない家族に怪しまれるでしょ」

僕からの指摘に河鹿さんは悔しそうに口をつぐんだが、ぼそりと「……それでもお金が貯まったらちょっとやってみよう」と言った。めんどくさがりな河鹿さんがこんな食い下がらなくて、相当懂

れている死に方なんだろう。女の子らしくきれいなものに憧れを抱くなんて、かわいらしいところがあったんだ。

「河鹿さんって意外と乙女なんだね」

「意外とって何よ」

その日はそれから河鹿さんがいかに女子力が高いのかという話を熱弁されて、活動は終わった。ボタン付けがうまくて、鞆には常に絆創膏を入れているし、誰かが忘れて困っていたら貸せるように消しゴムや傘はいつも二つ用意しているらしい。無駄に河鹿さんについて詳しくなってしまったが、この知識を活かす機会はたぶんない。

ちなみに帰ってからユリの花について調べてみたら食べない限り人体に害はない、という結果が出てきた。どうということかと思えば、植物の呼吸で酸素を薄くして窒息死するという自殺方法だったのだ。しかもそれは都市伝説のようなもので成功率は限りなく低いらしい。

一部始終を河鹿さんに聞かせると、サンタクロースはいないと聞かされた子供のような顔をしていた。少しかわいそうに思った。

「第五回！ 他力本願自殺志願者同盟定例会！ イン、非常階段」

「某鑑定番組風にしたかったのは伝わった」

今日も今日とてテンションが高い。今のところ定例会の冒頭は必ず何かボケをかましてくる。最初は遠慮して何も言えなかったのだが、だんだんそれも馬鹿らしくなってきて、今では気にせず発言す

るようになった。

それにしても河鹿さんの普段とのギャップがすごい。慣れてきたとはいえ、四年間にわたり積み上がっていた河鹿さんのお淑やかなイメージと同盟活動中のテンションの高さが噛み合わなくて、これ本当にあの河鹿さんかな？　と思ってしまうときがある。

授業中と休憩時間で声のボリュームが変わる人はわりと見るけど、河鹿さんみたいに他の誰かといるときと僕といるときでテンションが変わる人は初めて会った。それを楽しく思う気持ちと似たような思いをどこかでしたことがあると思ったら、レアポケモンを見つけたときだった。河鹿さんはレアポケモン。

「はい本日の議題は〜どうるるる、じゃん！ 『人に殺してもらうためにはどうすればいいか』です！」

「河鹿さんドラムロール下手、」

「私たちってできれば人に殺してもらいたくないじゃない？　でも事故なんか巻き込まれようと思って巻き込まれるものじゃないし、やっぱり確実に殺してもらうためには人から恨みを買うのが一番手取り早いと思うんだよねー」

河鹿さんは言葉を遮るようにして僕の肩に体当たりしてきた。地味に痛かったので思ったより河鹿さんが怒っているらしいことがわかる。じゃあドラムロールしなきゃよくない？

ぶつかられた右肩をさすりながら「そうだねー、でもそれただの嫌われ者になるだけじゃないかな」と返す。

「それはそうだけど、一人にターゲットを絞るより手当たり次第にやった方が確率高そうじゃない」「そうかなあ。僕は誰か一人に的を絞って、他には良い顔してる方が確率あがると思うけど。ターゲットになる人が我慢しきれなくなると誰かに訴えても『あいつがそんなことするわけないじゃん』って信じてもらえなかったら、もう自分でどうにかするしかないって追い詰められるんじゃないかな」

「うわ陰湿」

「人の恨みを買って殺してもらおうって発想が出てくる河鹿さんに言われたくない」

河鹿さんが心外だとも言いたげな不満そうな顔をした。たぶん僕も同じような顔をしている。ここで言い合っても脱線するだけなので、ため息をついて話を進める。

「そもそも恨みを買うって具体的には何するつもりなの？」

「大人数に実践するなら……そうね、片っ端からいちやもんつけて何でもかんでも否定していくとか」ぱっと頭に浮かんだイメージは当たり屋だ。でっかいサングラスでもかけて肩をいからせながら歩く河鹿さん……正直とても似合わない。端的に言う痛い。

「ただの痛い人だし、それで殺してもらえなかったら悲惨すぎるでしょ。そもそも河鹿さんはそれをやられたら殺してやるって思うくらい憎む？」

「うわ変な人だ近寄らないでおこうって思って終わるわね」

誰も幸せにならない計画を阻止できたことに満足してうなずいていると「そういう馬屋原はどんなのよ」と聞き返された。そうだな、僕がされたら嫌なのは……

「自分を信頼してくれている人や大事に思ってくれている人に暴言だったり暴力だったり……とにかく今までの信頼を裏切るようなことをする、とか」

「……そうね、仲良くしてる人とか好きな人に裏切られたら、確かに殺したいほど憎く思うかもしれない」

自分で話を振ったが、常日頃殺してほしいとばかり言っている河鹿さんにも、誰かを嫌だと思ったり、憎く思ったり、そういう負の感情を持たないわけじゃないということに驚いた。僕は河鹿さんが誰かに対して本気で怒っているところを見たことがなかった。唯一あるのは睨みつけられたことくらいだが、それも誰かに対してというわけではなく、河鹿さんの強い思いがにじみ出たようなものだった。あのとときの視線の強さを思い出して、体がぞくりとする。あのとときの高揚を振り払うように、僕は強いて話を続けた。

「肝心なのは誰にやるかってことだよ。うーん、例えば僕とか？」

半分悪ふざけで言った言葉に、「……そうね、うん、悪くないかも」と河鹿さんは肯定したけれど、僕から目をそらしていた。なんだかんだ河鹿さんは仲良くなった人には優しいから、僕に意図的に酷い言葉をかけるなんてできないんだろうな。

何を犠牲にしても目的を達する、という意思までは河鹿さんは持っていない。だけどそういうところが河鹿さんらしいと思うし、そういう河鹿さんを僕は好ましいと思うのだ。

「昨日夢をみたのよ。首を絞められる夢」

河鹿さんは非常階段に入ってくるなりそう言った。

唐突で先の見えない会話の切り出し方をされるのにも、僕はもうだいたい慣れてきた。こういうときは僕の意見など求めてなくてただ話を聞いてほしいだけだ、ということもわかってきたので僕は目線ですすめず。

「私は夢の中では中学生くらいで、一人の先生からしょっちゅう叱られてる悪い子だったの。だけど偶然先生の弱みを握ってしまって、先生はそのことに気付いてから『良く反省していい子になったから』なんて言って私を叱らなくなったんだよ」

河鹿さんは思い出すように遠くを見つめながら、僕の隣に腰を下ろした。意識が話に向かっていくからかいつもより座り方が雑で、僕はスカートのしわが気になる。

人の夢の話ほどよくわからないものはないと僕は思う。現実だったら絶対しないようなことをあつさりとするし、ありえないような出来事でもすんなり受け入れる。その足元が定まらない感じがして、すわりが悪い。

「そのことが嬉しかったんだけど、なんか嫌で。私は先生がよく一人でいる準備室に訪ねて行ったの。でもそこには先生は居なくて、ただ机の上に未開封の袋があつてね。私は好奇心で袋を開けちゃうの。開けて中を除いたとたん、後ろからその先生に声をかけられて。先生、私の手元を覗き込んで何をしてたかわかるとね、笑ったの。逆光の中で、授業中に見せるような顔じゃない嗜虐的な顔で笑ってた。それで左手を私の首にかけてゆっくり力を込めながらこう言ったの。『まだ反省が足りないんだよ』って」

それは怖い夢だったね、なんて無難な相槌を打とうと河鹿さんを見てぎよっとした。彼女は恍惚とした表情で左手を首に当てていた。今は同盟の活動中だ。単なる怖い夢の話なんて河鹿さんがするはずがなかった。

「それがすつつつごい気持ちよくて。私首つりは嫌だと思ってただけど、あんなに気持ちいいかもしれないなら、いざというときの自殺方法候補筆頭になっちゃうな」

話し終えるとすぐに河鹿さんはいつもの様子に戻って、僕に笑顔を向けた。河鹿さんとはときどきこんな風に自分の話に没頭して、話し終わるといつもの調子に戻ることがある。話に夢中になってる河鹿さんは僕のことなんて見えてないみたいで、ちょっと嫌だ。

「っていうか気持ちよかったって何。女の子がそういうこと堂々と言うもんじゃなくない？ 僕の考えが古いの？ あとその『先生』って誰なの、理想のタイプ？」

「どうしてそんな夢見たんだろうね」

内心少しもやもやしなながら、とりあえず当たり障りのない質問で会話を続ける。心底嬉しそうな河鹿さんの顔が見られなくて、風で足元に吹きこんだ葉っぱに意識を集中させる。

「昨日はお風呂上りで首にタオル巻いたまま寝てたから、そのタオルが首に緩く巻きついてたんだよね。そのせいでたぶんそんな夢見たんだけど、あれって夢の中だから気持ちよかったのか、それとも首を絞められること自体が気持ちいいのか……馬屋原はどっちだと思う？」

「さ、さあ……ちょっと僕にはわからないや」

わざと視線をそらしていたのに、顔を覗きこまれてびくっとする。頼むからその回答を僕に迫らな

いでくれ。嫌がらせでもなく純粹な疑問で質問しているのが、よりいたたまれない。仮にも女の子にこんな話を聞かされて、どう反応するのが正解なのか誰か教えてほしい。

「男の子だと夢精することあるって聞くし、夢の中はちょっとの刺激でもすごく気持ちよく感じるのかと思っただけど。もしあれが夢の中だからっていうなら……男の子の気持ちがちよっとわかったかもしれないわ」

「……河鹿さんさあ、女の子なんだからそういうことほいほい言うのやめなよ」

「あら、馬屋原ってば生理現象を恥ずかしく思うような思春期だったのね」

「誰だっかっていう話されると反応に困るよ。恥ずかしくないわけ？」

「えっ、馬屋原相手に恥とかいう概念ないわよ」
そこまで気を許されていることに喜ぶべきなのか怒るべきなのか判断しかねる。僕を何だと思ってるんだろう、この人。

河鹿さんはただ話を聞いて、適当に返事をしてくれる人がほしかっただけで、それは僕じゃなくてもよかったんじゃないだろうか。ふと浮かんだ考えを僕は振り払った。僕が河鹿さんの理解者になったから僕たちはこうして同盟を結成する仲になって、だからこそ河鹿さんは僕に下ネタギリギリの会話を仕掛けてくるんだろう。

「あー、でも話してすっきりした！ めちゃくちゃ誰かに話したかったんだけど、こんな話出来る人なんて馬屋原以外にいないんだもん」

考え込んでいた僕に向かって笑顔で放たれたそんな一言で、沈んでいた心が簡単に浮上する。自分

でも単純なやつだと思うけど、河鹿さんの『特別』になったみたいで照れくさい。

「……河鹿さん、座り方が雑すぎてスカートしわになってるよ」

「え、うわ本当だ。帰ったらアイロンしなきゃ」

ちよっとした照れ隠しで言った言葉だったが、これで完全に河鹿さんの意識は夢の話から逸れたようだった。「帰るときちよっと恥ずかしいわね」としわになった部分をつまんで困ったようにしている河鹿さんに、少しだけ胸がすっとした。僕は河鹿さんのそういう顔の方が好きみたいだ。

河鹿さんと同盟を結成して二か月が経とうとしていた六月中旬。僕たちはこのところの雨でいつもより心なしじめじめしている非常階段に座り込んで、同盟活動という名のおしゃべりをしていた。

この日は「どうせ死ぬならかつこよく死にたい！ というわけで自分もこういう状況でなら死にたいと思う『かつこいい死に方』について語っていきましょう」という河鹿さんの発言のもと、意見を交わしていた。川で溺れる子供を助けて死ぬシチュエーションに憧れるだとか、車に轢かれそうになった猫を助けて死ぬと猫がお迎えに来てくれそうだとか、盛り上がっていたのだが、河鹿さんが四月から伸ばしているという髪に対して「あー、もう！ うっとおしい！」とキレだったので話は一時中断された。

「湿度で髪がまとまらないし、首とか手にまとわりついてきてうざったい！」

さつきからやけに髪をくくってはほどき、くくってはほどきをくりかえしていると思ったら湿度のせいだったのか。

「梅雨だからってじめじめしすぎよね。今日だって晴れ間が見えるって予報だったのに、今にも雨が降り、そう？」

妙なところでついた疑問符に不思議に思っただけで河鹿さんを見ると、河鹿さんは「馬屋原、ちよっと見てあれ」とA棟の方を指さした。

視線を向けると、A棟の屋上に転落防止柵から身を乗り出すようにして下を見つめている女の子がいた。A棟という場所と、僕ら高校生と違う青色のシャツからして中学生だろう。短めの黒い髪が風に揺られて、ちらりちらりと白い顔が見えるのだが表情はまったくわからない。ただ女子が破りがちな『スカートは膝下丈』という校則をきっちり守っているの、真面目な子だな、と思った。

「どうしたんだろうあの子」

「今にも雨が降り出しそうな日に、屋根のない屋上にいるなんて珍しいと思わない？」

自殺志願者かもしれないわね、とどこか嬉しそうに河鹿さんは言ったが、そうぼんぼん自殺志願者とエンカウントしてたまるかと思は思う。

屋上に女の子が一人にいることもわざわざ指摘されると気にならないこともないが、誰だっぴ一人になりたいと思うときはあるだろうし、その選択肢として屋上を選ぶのかもしれないし、不自然ではないように思う。下を見ているのだからおおかたハンカチやプリントが風にあおられて下に落ちたとかそんなところだろうと見ていると、なんと女の子が柵を乗り越えようとしはじめた。

「河鹿さん！」

僕が声をかける前に河鹿さんはもう立ち上がっていた。非常階段の扉を乱暴に開け放つと後ろも振

り向かずに全速力で駆けていった。行先は聞くまでもなくA棟屋上だろう。一応非常扉の鍵を閉めてから僕も後を追った。

「待って！あなたの事情は知らないし、聞くつもりもないけど死ぬ前に教えてほしいことがあるの！」
あ、ものすごくデジャヴを感じる。僕は屋上の扉にもたれかかりながら、階段ダッシュのせいで息を荒げながら後輩に絡みにいく河鹿さんと、柵の外側でそんな河鹿さん怪しめばいいのか心配すればいいのか戸惑っている後輩とをどこか冷めた目で見ていた。

そうか……僕がドラマチックだと思ってた河鹿さんとの出会いって、外から見たらこんなに怪しいんだなあ……。

「どうしてそんな勇気が出せるの」

僕へ聞いたのとまったく同じ質問を繰り返した河鹿さんに、僕は少し不機嫌になる。あの日、あの場所にいたのが僕じゃなくなつて河鹿さんは同じように声をかけたのだと思うとなんだか腹が立つ。

名前も知らぬ後輩は僕と河鹿さんからの視線を受けて、申し訳なさそうに口を開いた。

「あの、すみません。私、今死のうとは思ってないです。ごめんさい」

その答えに思わず僕たちは顔を見合わせた。河鹿さんは僕と同じような不思議そうな顔をしていて。一瞬のアイコンタクトの後、二人を代表して河鹿さんが後輩へ問いかけた。

「じゃあどうしてそんなところにいるの？」

後輩はどう答えるべきか迷うように僕と河鹿さんを見比べた後、一つため息をついてやけくそのように口を開いた。

「自殺を、計画中なんです。ついでに言うとは私は勇気なんか持ってません。あるのは、復讐心です。言ってしまうは単なる当てつけなんです」

僕たちはもう一度顔を見合わせた。

とりあえず河鹿さんが後輩を柵の内側へ引っ張り込み、良かったら話してみないかと口説き始めた。いつもだったら、初対面の相手にそんな踏み込んだことを聞くのはためらわれて河鹿さんを止めていただろうが、誰かへのあてつけで死んでやろう、という考えに僕は興味を引かれていた。自分にまったくなかったその思いに、詳しく聞いてみたいという好奇心が刺激された僕には河鹿さんを止める理由もなかった。

自殺を計画している、と言ってしまったからか、後輩は案外早く河鹿さんの説得に応じた。最後に残ったためらいを封じ込めるように大きく息を吸うと、向かい合う僕らにこう告げた。

「私は、母に今まで自分がしてきた行いを一生後悔し続けてほしいんです」

言い切った後輩の目は恐ろしいほど暗い情熱に燃えていた。

「中等部三年二組の藤後美奈といます」

そう名乗ると、彼女は堰を切ったように話し始めた。

彼女は幼いころから母親にいろいろなこと強要されてきたのだという。大して興味のないピアノのレッスン、やりたくなつてなかつた英会話教室、小学校受験のための学習塾などなど。習い事の数は片手では足りず、毎日毎日何かしらの予定が組まれていたらしい。おかげで友達から遊びに誘われても断ることしかできず、そのうちとうとう誘われること自体なくなつた。

「昔はそれを嫌だとは思っていません。母は『美奈のためなのよ』って言ってましたし、それが母の愛情なのだと思っていました。友達と遊べないのは悲しかったけれど、何より母の期待に応えたいと思っていました」

しかし藤後さんは小学校受験に失敗する。それ以来母親は藤後さんを叱ることが増えたという。母親の望むような結果が出せないと「どうしてこんなこともできないの」「どうしてこんなことがわかって起きる前に出て行くような生活をしていた。たまに家にいるときは母親のように問い詰めることはしなかったが、かばうようなこともせずに寝ていることが多かったという。

「今思い返すと、私はそんなに成績が悪かったわけじゃないんです。教室で一番にはなれないけど、上から数えたほうが早いような位置にいるんです。先生に怒られることはないけれど、褒められることもないような、そんな位置でした。でも母はそれじゃあ満足してくれなかった。母が頭の良い人なので、娘の私をもっとできるはずだと思っていたのかもしれませんが」

結果に納得のいかない母親はやればやるだけ成績が良くなるはずだと言って徐々に習い事の時間を増やしていき、時には一日二つのレッスンをこなすこともあった。そのせいでクラスメイトがよく話題にしているテレビやゲーム、漫画などの娯楽から遠ざかり、話についていけなくなった。そのせいで「つまらない子」と誰からも相手にされないようになっていた。

おまけに両親の仲もぎすぎすし始めた。いつからか母親は藤後さんが結果を出せないと「いったい誰に似たのかしら」と口にするようになったのだ。嫌味のようなその言葉に最初は眉をひそめるだけ

だった父親は、その言葉がくりかえされるうちに我慢の限界を迎えたのだろう。あるとき怒り狂って母親と大喧嘩した末に別居。別居中に父親が愛人をつくったことが原因となり、二人は藤後さんが小学校六年生のときに離婚した。離婚調停中の両親は、本当にこの二人は好きあって結婚したのかと思うくらいにいがみ合っていたという。特に母親は離婚後も父親を悪しざまに言うことが多かった。あなたはあんな男に引かからず幸せになるのだと繰り返し説いた。藤後さんはそんな母を悲しいとも思ったが、醜いとも思った。

「結局私は中学受験も失敗して、第一志望のところには落ちました。だけど滑り止めのつもりだったここには受かって、言われるがまま入学しました」

中等部のうちは全員どこかの部活に所属しなければいけない、という校則のおかげで習い事も減らすことができた。部活でできた友達と遊ぶ時間もつくれるようになった。母親からの束縛や干渉は相変わらずだったが、友達とも良い関係を築けていて人生で一番幸せかもしれないとまで思っていた。高校受験に挑むことを強要されたのはその矢先の出来事だった。

「ここ中高一貫なんてつきり高校もこのまま進学できると思ってたんです。それなのに……しかもこの学校って別の高校を受験したら合否に関係なくもうこの高校には進学できないじゃないですか。やっと思える学校生活を送れているのに、どうして母は邪魔をするんだろうって考えて、思い返したら私の不幸は全部母が原因じゃないかってやっと思いがついたので……」

そして藤後さんは母親に反発を始めた。最初は自分の思いをわかってもらおうと根気強く説得を続けていたのだが、一向に母親が受け入れる気配がないので反発は徐々に過激なものへ変わっていつ

た。言われたこと全てに言い返すときもあれば、反対に全て無視することもあった。母親の料理に一切手をつけないという反発をしたこともあったが、食材に罪はないと思つてやめたらしい。いろいろやってみたが母親の意見は変わらず、このままでは高校受験は避けられない。唯一試してないことといえば家庭内暴力くらいだが、さすがにその手段に訴えかけるのは気が引ける。

「じゃあもういつそ死んでやろうと思つたんです」

母親の要求どおり受験して新しい環境に行くくらいなら、当てつけに死んでやろうと思つたのだと思う。さすがに話が飛躍しすぎじゃないかと僕は思わず口を挟んでいた。

「別に新しい環境に行つても、それなりにうまくやれると思つて」

「そう、かもしれません。でも嫌なんです。今の友達以上に仲が良い子なんて作れると思えないし、作りたくもないんです。今のまま高校三年間も過ごしたいんです」

積もり積もった母親への恨みもあるとしても、いささか頑なすぎやしないだろうか。同じことを思つたのだろう河鹿さんが「そんなに今の友達が大事？ 別々の学校に行つても仲良くすることはできると思うわよ？」と問うた。

「私、今の友達が一番大事だと思つてます。仲良くしていたら強いつて強い思いがあれば、今と同じような関係を続けることだってできると思います。でも……」

藤後さんはそこで言葉を切つて、一度口を閉じた。すぐにまた口を開いたけれど、一瞬のためらいは、その先の言葉を怖がつているようだった。

「きっと私は新しい場所に行つて、友達ができたらその人にもきっとそう思つちやいます。もしかし

たら今の友達よりも大切に思つちやつて、今の友達を必要じゃないと思うかもしれない。それが怖いんです。変わつてしまう自分が怖い。心変わりしていく自分が怖い。そんな、うちの母と同じ人間に成り下がってしまうのなんて絶対に嫌です。そんな事実をつきつけられるくらいだったら私は、」

そこから先の言葉を藤後さんが言うことはなかったが、僕たちには痛いくらいに伝わってきた。悪いほうへ悪いほうへ考えすぎじゃないかと思つたが、それほどまでに藤後さんは思いつめていたというところだろう。

藤後さんが自殺しようだなんて思い切つた行動に出た理由として、友達を大事に思う気持ちにはもろんあるが、何より強いのは両親、特に母親と同じ人間になつてしまうことへの嫌悪感に起因していたのだ。僕は話の途中まで、新しい環境に行くことを必要以上に憂鬱に思つてしまう子だと思つていたことを恥ずかしく思つた。

藤後さんの言葉はまだ止まらない。顔を歪めて苦々しげに続ける。

「それに何より嫌なのは私のためといいながら、私のことなんて考えていないことです。母は昔家庭の事情で、やりたかつたことをたくさん諦めてきたらしいんです。それで、自分ができなかつたぶんまで私に押し付けて満足げにして、しかも事あるごとに『美奈の名前は私から取つたのよ』『美奈は私の分身みたいなものよ』つて繰り返すんですよ。呪いみたいに。ああもう嫌になる。私は母の分身じゃないし、美奈なんて名前も好きじゃない。私の心を無視するのはもういい加減にやめてほしい。反吐が出る」

そこまで一息に喋つてから、藤後さんははつとしたように僕たちを見た。勢いに乗つて心のうちを

言い過ぎたと思っっているのだろう。それほど彼女は母親への不満を溜め込んでいたということもある。今回たまたま受験がきっかけになっただけで、遅かれ早かれ藤後さんの不満は爆発して似たような事態を引き起こしていただろう。

あたふたとしている藤後さんに、気にしなくていいんだよというように河鹿さんが優しく問いかける。「だから自殺してお母さんに復讐するの？」

「そ、そうです。母なんて分身である私が死んで焦ればいいんです。子供を死なせた母親だ、って一生消えない傷を心に負えばいいんです。やり直せない日々の後悔して、私のことを一生引きずってあげばいいんです」

そう言いつのつた藤後さんはわがままな子供のようだったけれど、どこか痛々しくて見ているのがつらい。

「私の事情は、こんな感じですよ。決意は固いですし、何を言われてもやめる気はありません。だから次私を屋上で見かけても今日みたいにやって来ないでください。お願いします」

「なるほど、事情はわかったわ。その上で藤後さんに提案があります」

「提案？」

聞き返したのは僕だった。藤後さんの決意は固いらしいし、要するに邪魔をしないでくれと言われているのだ。僕らに死にたがっている人を止める権利なんてないし、他力本願な僕らが積極的に関わっていくべきでもないと思う。すべきことは何もない、はずだ。

「自己紹介が遅れたわね。私は高等部二年一組の河鹿静佳しずか、こっちは二年四組の馬屋原元氣げんき。私たち

は二人で他力本願自殺志願者同盟を作って活動してるの」

「他力本願自殺志願者同盟……？」

「そう、死にたいけど死ぬ勇気がなくて死ねない。あわよくば誰かに殺してほしい。そんな二人の同盟よ。藤後さん、自殺を決行するまでの腰掛けでいいから入部してみない？」

固まる僕と藤後さんを気にせず「まあ藤後さんは誰かに殺してほしいってわけじゃないから……：うね、仮入部ってかたちになるけど」なんて河鹿さんは言っているけれど、そんな些細なことは問題じゃない！

「ちよつと河鹿さん本気？」

「本気も本気、大真面目に言ってるわ」

「だいたい藤後さんを入部させてどうするの。藤後さんのために僕たちにいったい何ができるの？何もできないよ。変なこと言っただけで後輩に迷惑かけるのはやめて」

言葉を重ねる僕に河鹿さんは「入部じゃなくて仮入部よ」とのんびり訂正をした。だからそんな細かいことはどうだって良い！

なおも文句を言おうとしたところに藤後さんが「私からも聞きたいです」と口を挟んだ。自殺する理由をまるっと話してしまったからか、さっきまでの藤後さんは僕たちをだいたい心を開いてくれたようだった。それが河鹿さんの質問のせいで変わった。僕たちに対してぴりぴりとした警戒心が感じられる。

「私とその同盟に仮入部したとして、先輩は何をするつもりなんです？ いったい私をどうしたいん

ですか」

疑問はもつともだ。自殺を決意した人が自殺志願者の同盟に誘われるなんて聞いたことがない。怪しまれて当然だろう。僕は答えを促すように、藤後さんに続いて河鹿さんを見た。河鹿さんは藤後さんを安心させるように、微笑んだ。

「そんなに警戒しないで。私はあなたの自殺をサポートしたいだけよ。例えばそうね、屋上から飛び降り自殺をしたとして、藤後さん飛び降りるときの姿勢は決めてる？ 四階分の高さがあるとはいえ、当たり所によっては即死じゃないし、後遺症だけ残って終わりなんて悲惨な結末を迎えることになるわ」

あー、いつもの同盟中の河鹿さんだ。僕が通常運転の河鹿さんに安心感を覚えているのとは反対に、藤後さんは何を言い出すのかと目を白黒させている。

「それに高いところが苦手じゃないから飛び降り自殺を選んだらうけど、高いところから落ちることは苦手じゃないのかしら？ もし落ちるのが苦手なのが飛び降りてからわかったら、大声で悲鳴を上げながら死ぬことになるけど大丈夫？ 恥ずかしくない？」

「えっ、高いところが大丈夫だから落ちるのも平気だろうと思っただんですけど、違うんですか？」

「全然違うわ。遊園地の乗り物でいうとジェットコースターとフリーフォールくらい違うものよ」

あ、藤後さんが河鹿さんの会話のペースに乗せられた。河鹿さんは調子に乗って立て板に水の勢いでしゃべっている。もはや自殺とは関係ないことについて話しているだけなのだが、藤後さんの目には河鹿さんへの尊敬すら見て取れる。

一通りしゃべり終わった後で河鹿さんは藤後さんの手を取って詰め寄った。

「あと藤後さんをどうしたいのかわられると、きちんと自分が思い描いた自殺を成功させてあげたいと思ってるわ。だから、どうかしら？ 仮入部してみない？」

藤後さんは勢いに押された様子でこっくりと頭を縦に振った。藤後さんから見えない角度で河鹿さんがガッツポーズをしたのを僕は見逃さなかった。絶対本物の自殺志願者についてもっとよく知りたいただけだと思う。

「他力本願自殺志願者同盟会長として、藤後さんの仮入部を認めます！」

高らかに宣言した後でちらりと視線を向けてきた河鹿さんに、ため息をつきながら頷いた。河鹿さんはあれで頑固なところがあって、一度決めたことは譲らない。同じ同盟の仲間といえども止めることは難しいだろう。僕の存在を一応忘れずに同意を求めてくれただけで、いいことにしよう。僕は藤後さんの入部、いや仮入部を阻止することを諦めた。河鹿さんが具体的に何をするつもりか知らないが、もうこうなったら乗りかかった船だ。後輩のためだし、何かしろというのならできるかぎりはしあげよう。

「どうか河鹿さんが同盟の会長だったんだな？ 別にいいけど。」

「それで藤後さんにさっそくお願いがあるんだけど」

「何ですか？」

「藤後さんが自殺を執行するときには私を殺してくれない？」

それが目当てか！ と正直僕は唸った。河鹿さんのことだから単なる親切心だけで藤後さんと同

盟に引き入れたんじゃないかと思っていたが……その手があったか。他力本願自殺志願者の一番の問題は、殺してくれる誰かが必要だということだ。その誰かも誰でも良いというわけにはいかない。できれば楽に殺してくれて、自分に自殺の意思があったのだということばらさない優しい人が望ましい。その点藤後さんはかなり良い線を行っている。年下の後輩ならば先輩である河鹿さんがコントロールしやすい上に、藤後さんは自殺する予定がある。特に接点のなかった藤後さんが河鹿さんを殺して死んだとなればいろいろと憶測はされるだろうが、遺書など残さなければ真相は本人たち以外にわからない。しかし河鹿さんを殺したところで藤後さんにメリットなど一つもない。後輩という立場もあって藤後さんは断りにくいだろうから僕が助け舟を出そう、と考えていたとき「……別に、いいですよ」と藤後さんが返事をした。

「娘が人様の娘を殺してから死ぬなんて、母の青ざめた顔が目には浮かぶようです。ただ自殺するよりももっともつと後悔してくれると思うと、愉快ですね」

そう言っただけで藤後さんは暗く笑った。僕がいうのも何だが自分の人生をもっと大事にしたらどうだろうか。

今日はもう遅いから詳しい話はまた明日の放課後に、という待ち合わせをしてから藤後さんには帰ってもらった。屋上の扉が完全に閉まったのを確認してから、僕は河鹿さんに目を向けた。

「彼女、藤後さんさ、本当は死にたくないんじゃないかな」

「……どうということ？」

河鹿さんは僕の言葉の意味を聞き返してきたけれど、行動とは裏腹にその表情は僕の言いたいこと

なんて全部わかっているみたいだった。たぶん河鹿さんも僕と同じ結論に達していて、だけどそれを見ないふりをしている。

「母親への当てつけだ、私のことを一生後悔すればいいって言ってたけど、それって母親にちゃんと自分のことを見てほしい、愛してほしいって言うてるみたいだった。たぶん彼女、母親の教育方針とか、娘への態度が変わったら死にたいなんて言わなくなると思う」

「……そうかしら」

僕と目を合わせないまま、河鹿さんは小さく反論した。

「母親にどんな形であれ執着してるのは確かだと思う。だけど死ぬときには私を殺してくれるって約束したもの。私はそんな約束をする藤後さんの想いの強さを信じるわ」

信じる、というわりに言葉に強さはない。河鹿さんは自分を殺してくれるかもしれない可能性に絶っているだけのように感じられた。

まあこれ以上言ってもしょうがない。日も沈んできたし僕らもそろそろ帰ろう、と口に出しかけたところで、僕はあることに思い至った。

「河鹿さんさ……もしかして僕と話したあの日も、あわよくば殺してもらえないかなって思ってた？」

僕の質問に河鹿さんの体がびくりと動く。凶星だなこの人。ここまで僕に対する反応と藤後さんに対する反応が同じだと逆に笑ってしまう。

「そうです。あの日、どうせ死ぬつもりなら死ぬ前に私を殺してくれないかなって思っていました。ご

めんなさい」

河鹿さんは決まり悪げに僕を見て、ごによごよと小声で謝った。こういうときだけ敬語使って、反省してますよって空気出すのずるいよなあ。素直に謝ってくれるところは美点だと思うけど。

「もういいよ、結局そのときの河鹿さんの企みは失敗してるし。自殺志願者に殺人を頼むっていうアイデアももらえたからそれでチャラね」

もとから大して怒っていたわけでもないのに軽く許すと、河鹿さんはほっとしたように目元を緩めた。そう、別に怒っていたわけじゃない。どちらかというと拗ねていたのだ。同じようなシチュエーションで出会った人になら誰だつて河鹿さんは心を開く。そんなことはうすうすわかっていたことなのに、いざ目の前で実演されると妙に寂しくて腹立たしくて拗ねていただけ。でもまあ出会ったのが藤後さんのような人で良かった。僕たちとは全然違う立ち位置から自殺に向き合っていて、そしてどんな形であれ僕たちの前からいずれ消える人だ。僕の立ち位置は揺るがない。何なら両手に花だと喜んでもいいくらいだ。うん、と僕は自分にうなずいて屋上の扉を開けてくれている河鹿さんのもとへ向かった。

翌日の放課後、僕らは図書室の凶鑑コーナーで藤後さんを待っていた。僕を初めて非常階段へ案内したときとまったく同じパターンだ。藤後さんもあの三分間の洗礼を受けるんだなと微笑ましく思っていたとき、入り口から藤後さんが顔をのぞかせた。藤後さんに気づいた河鹿さんは「馬屋原は適当にタイミングみはからって非常階段に来てね」と小声で僕に言うと、きよろきよろと周囲を見渡して

いた藤後さんのもとへ行ってしまった。えっ、僕置いていかれるの？

戸惑っている間に河鹿さんは藤後さんを連れて図書室から出て行ってしまった。えっ、本当に藤後さんはあの謎の三分間を体験しないの？ 中学と高校では普段ほとんど接点がないので、もし知り合に見られたとしてもごまかしやすいというのがある。あと河鹿さんは確か未っ子だといつか言っていたので、お姉さんぶって年下をリードしたいのもあるのだろう。だからと言って僕のとときとあまりに扱いが違いすぎないか？ と釈然としない思いを抱えつつ僕は一分待つて図書室を出た。三分間待たなかったのはせめてもの抵抗なのだが、河鹿さんはいちいち時間気にしてないんだろうな……。

既に鍵が開いていることを確かめて非常階段の扉を開けると、河鹿さんと藤後さんがいつもの僕と河鹿さんのように階段に腰掛けていた。

「あ、馬屋原先輩。お邪魔してます」「早かったわね」

僕に気づいた二人が同時に声をかけてくる。本当に自分がここにいて良いのだろうかと思し訳なさそうに身を縮ませて上目遣いに見上げてくる藤後さんと、対照的に尊大な態度で僕を出迎える河鹿さん。僕の中で藤後さんの株が爆上がりである。

とりあえず座ろうと思うが、いつもの場所を藤後さんに取りられた形になっている。どこに座るべきかと少し迷って、二人の後ろの踊り場に腰をすえた。僕が座ったのを確認してから

「それじゃあ三人揃ったところで、他力本願自殺志願者同盟、定例会を開催します」

と、河鹿さんの号令がかかった。おふざけのない定例会開催の号令は初めてで、僕は耳を疑った。

「よろしく願います」

「……よろしく願います？」

これがいつも通りなんだろうな、という顔で挨拶を返す藤後さんに続いて僕も挨拶を返した。いつもより数段真面目だ。今までの定例会は全体的に悪ふざけって感じだったのに、一気にちゃんとした部活っぽくなっている。

「さて、藤後さんが仮入部してから初めての定例会ということで、今回の議題は『藤後さんの自殺方法について』です」

藤後さんが真剣な表情でうなずく。今日はおふざけ一切なしのシリアスモードだ、と心に刻み込んでから僕も真面目にうなずく。

「藤後さん、自殺方法はどんなものが良いの？ やっぱ飛び降りが良いのかしら」

「そうですね、第一候補は飛び降りです。まず条件として死体ができるだけグロテスクで、学校で死ぬる方法を考えたんです。死体がきれいなままより、崩れて本人かわからないくらいの方が母にショックを与えられると思ったのと、あと学校で死んだほうが学校を出て行くことを心の底から嫌がっていたことがわかりやすく、より母への当てつけになると思っていたからです。母の目の前で命を絶つという案も考えたんですが、すぐに救急車を呼ばれて生き残ってしまう確率が高そうだと思っやめました」

「条件に合う自殺方法はいっぱいあったと思うけど、その中で飛び降りを選んだ理由は？」

「死ぬまでに時間がかかる方法やあんまり苦しそうな方法は、死ぬまでの間に自殺なんてしなきゃ良かったって後悔しちゃうので外しました。最後は首吊りと飛び降りの二択だったんですが、首吊り

は準備が必要だし人に邪魔されないちょうどいい場所が思い浮かばなくて……だから準備が要らなくて、放課後はほとんど人がいない屋上からの飛び降りに決めました。高いところは苦手じゃないです」

昨日聞いた話の熱量と、自殺の下見のためとはいえ転落防止柵を乗り越えるという行動力からしてだいぶ計画が固まっているのだろうと思っていたが、こうも自分の中の方針がはつきりしていたとは。よどみなく答える藤後さんに、河鹿さんはいつもより力を入れていた顔を破顔させた。

「えらいわ。ちゃんと死に方に条件を設定して選んでいるうえに、復讐の念を持って余すでもなく冷静にきちんと死ぬるかどうかを考えているなんて！ 藤後さんをスカウトした私の目に狂いはなかったわ！」

「あの……褒めてもらって嬉しいですけど、私なんてまだまだです。昨日河鹿先輩に指摘されるまで飛び降りるときの姿勢や、そもそも飛び降りに対する恐怖心があるかもしれないことに気がついてなかったんですから」

抱き着かんばかりに身を乗りだす河鹿さんに、藤後さんはあくまで控えめに答えた。喜ぶどころか、考えが至らなかつた自分を責めているようにも感じられる。

「初めて計画を立てるんだから穴があるのは当然だよ。実行前に気づけたんだから、それで良いんじゃないかな」

「そうですね。だけど、明らかに私にはシミュレーションが足りませんでした。自殺は人生に一回限りです。失敗したら次ができるかもわからない。それなのに私は、いろんなことを見落として。こんな真剣に自殺に向き合ったとは言えません」

そこまで気に病む必要はないのだとフォローしようとするれば、さらに反省させてしまった。僕からすれば自殺という行為に十分真剣に向き合っていると思うのだが。本当にこの子はこっちが引け目を感じるくらい自殺に全力で、真面目だ。こっちが後ろめたくなるくらいに。

「だから、私がちやんと死ぬるように、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします」

でもそう言って僕らに丁寧に頭を下げるから、面倒見がよいとはいえない僕でも手伝ってあげたくなるのだ。先輩だし。少し迷って、もちろんと言おうと「も」の口を作ったところで河鹿さんが力強く「もちろんよ！」と返事をした。僕河鹿さんのそういうところ好きだけど、たまに嫌い。僕の心なんて露知らず、河鹿さんは藤後さんがちやんと死ぬための議論を続けていく。

「じゃあ自殺を成功させるために何をするかなんだけど、やっぱり私は練習してみるのが一番だと思うのよ」

「練習って、飛び降りの？」

聞き間違いかと思って確認をすれば何わかりきったことを聞いてくるんだという顔で「そうよ」と肯定された。正直聞き間違いであってほしかった。

「そもそもどこでやるつもりなの。そんなこと」

いろいろ聞きたいことはあるが、まず真つ先に気になったところはそこだった。さすがに屋上からバンジージャンプみたいな真似はしないだろうし、校内に飛び降りの練習ができそうで危険がなく、かつ目撃者もでないような場所が思い浮かばなかったのだ。

「体育館に大きな走り高跳び用のマットが出てるじゃない？ それ目がけて体育館の二階から飛び降

りたらどうかなんて」

体育で使う道具は基本的に使い終わったら倉庫にしまわれる。しかし走り高跳び用のマットは例外だ。ダブルベッドくらい大きくて、厚みも六〇センチほどあるので倉庫の入り口を通らないのだ。だから走り高跳び用のマットだけは倉庫ではなく、体育館の隅にそのまま置かれている。

安全性は大丈夫そうだが、当然ながら体育館はバレー部やらバスケット部やら室内競技の運動部が放課後毎日使っている。お昼休みもボール遊びをする生徒や、体育館に設置してあるピアノを弾く生徒など誰かしらいることが多い。人目の問題はどうか聞こうとして、僕はあることを思い出した。

「そっか、来週からテスト期間に入るんだ」

「そう、テスト期間なら部活は休みになって放課後の体育館には誰もいなくなるでしょう？ だからテスト期間入ってすぐの放課後に決行しようと思ってるんだけど、藤後さん時間あるかしら？」

「はい、ちょうどテスト期間初日の放課後は空いています」

中等部と高等部で授業終了時刻が違う日もある。待ち合わせの場所と時間を決めてから、河鹿さんがふと気づいたように藤後さんに問いかけた。

「そういうえば私たちは帰宅部で習い事もないから良いんだけど、藤後さんは部活や習い事は大丈夫なの？」

そうだった、確か彼女はたくさんの習い事をしてはいるはずだ。中学に入ってから多少マシになったと昨日聞いてはいたが、相変わらず習い事を継続しているに違いないし、部活動だってあるはずだ。少々不安になったが、藤後さんはあっさりと「大丈夫です」と返した。

「私美術部なんですけど、イベントの前にちょっと描けばいいようなゆるい部活なのである程度はさぼっても叱られないです。習い事のほうも毎週部活のある日は遅い時間にしてもらっているので問題ありません」

「そう？ でも部活をさぼり続けるわけにもいかないし、できるだけ中等部の授業が早く終わった日や習い事が休みの日に活動したいと思うの。急にそういう日ができることもあるだろうから携帯で連絡が取れたら楽なんだけど、持ってるかしら？」

河鹿さんがスカートのポケットから携帯を取り出すのを見て、藤後さんは申し訳なさそうに眉を下げた。

「すみません、持っていないんです。母が高校に入るまではだめって言って……急な用事があるときは家の固定電話をお願いします」

「わかったわ。私の携帯番号も教えるから、何かあったら連絡してね」

番号を教え合います二人を他人事のように見ていたら、河鹿さんの番号を聞き終えた藤後さんが物言いたげに僕を見てきたので慌てて僕も番号を言った。

何かの機会に必要なかもと河鹿さんは藤後さんの住所も聞いて、答えた藤後さんの家の住所は僕の家からほど近い場所だった。もしかしてと思って聞いてみると出身小学校が同じだった。どうやら小学校からの後輩だったらしい。思わぬ共通点に藤後さんは嬉しそうだったが、河鹿さんは一人だけ仲間外れのように感じたのか少し拗ねていた。めんどくさい。

テスト期間初日の放課後、僕が体育館に着いたときには二人はそろって体育館の隅にいた。僕が来るまでに二人でがんばってくれたらしく、普段体育館の左隅に片付けられている走り高跳び用のマットはバスケットゴールなどがない壁沿いの真ん中あたりに移動されていた。テスト期間初日であると同時に夏服移行期間も終了したので二人とも夏服だ。うちの学校の夏服は半袖シャツに学校規定のスカートやズボンだけで、リボンやネクタイもないたってシンプルなものだ。女子は靴下まで学校指定のもので、冬服や合服はオーソドックスな紺のハイソックスなのだが、なぜか夏服の間だけふくらはぎの真ん中くらいの丈の白ソックスになる。正直他の学校と比べてあまりかわいいものではないのだが、河鹿さんは妙にそれが似合っている。思わずまじまじと見てしまうと、視線に気づいた河鹿さんがポーズをとってくれた。

「ダサめな学校の夏服が似合うでしょ。微妙にダサイ服が似合うことに定評のある私ですから」

なんだその定評。褒められているのか、けなされているのか判断に困る評価だ。ちょっと引いている僕に河鹿さんは「写真撮ってもいいわよ？」とポーズをとったままほざいた。

「遠慮しと……いや、やっぱり撮ろう」

「えっ!？」

ふざけて言ったことに乗られると思っていなかったのだろう。僕が携帯のカメラを構えだすと、河鹿さんはうろたえて藤後さんに助けを求めるような視線を向けた。

「藤後さんも一緒に良い？」

藤後さんに聞いた途端河鹿さんから睨まれた。別に河鹿さんを追い詰めたくて藤後さんに話を振っ

たわけじゃない。ちょっとした考えが浮かんだからだ。

藤後さんは戸惑いながらも「河鹿先輩が撮るなら」と了解してくれた。藤後さんの返事を聞いて腹を決めた河鹿さんは自主的に藤後さんの隣に並んだものの、さっきのようなポーズはせずに控えめにピースサインをした。「はい笑って」と声をかけるが、二人とも笑顔がぎこちない。別にきれいに撮る必要もないのでそのまま二人並んだものと、それぞれ一人だけのものを何枚か撮って解放すると、河鹿さん是不審そうに聞いてきた。

「どういう風の吹き回しよ。普段だったら絶対私の冗談のつてこないくせに」

「んーいやちよっと思いつき。今藤後さんの写真撮っておいて、藤後さんの死後に家に送ったら怖くない？ ほら、つらい記憶や悲しい記憶って忘れられなくても、年々薄れていくものじゃん。お母さんは藤後さんが自殺したら悲しむし後悔するだろうけど、それもいつまで続くかわからないでしょ。でも忘れたころに自分の知らない娘の写真が送られてくれば、きつと怖がるし当時の感情を思い出して、より苦しむことになるんじゃないかな」

「ただの思いつきだったのだが、藤後さんは思いのほか乗り気で話ほとんどん拍子にまとまった。これからは活動中に僕が写真を撮ることになり、藤後さんの死後は一定期間をおいて母親に写真を送ることが決定した。」

何も知らず無邪気に喜ぶ藤後さんには申し訳ないが、自分の思惑通りにことが運ぶと嬉しいものだ。思いつきがうまく採用されたこと少し気を良くしながら、河鹿さんと藤後さんと一緒に体育館の二階へ通じる階段へと足を進めた。

「ねえ、何で僕が飛ばなきゃいけないわけ？ おかしくない？」

僕は狭い足場の中で体の向きを反転させて、柵の中の河鹿さんと藤後さんを恨めしげに見ながら言った。体育館二階の通路に設置してある柵の外側に僕はいた。

柵の外側にいるのは今年度二回目だ。普通に生活していたらこんな目にあうことはなかっただろう。僕は他力本願自殺志願者同盟に入ったことを後悔すらしていた。

「おかしくなんてないわよ。一応マットが敷いてあるとはいえ、体にどれだけ負担がくるかわからないじゃない。そんな危険なこと藤後さんにさせられないし、馬屋原は一応男の子なんだから私たちより多少頑丈でしょ？」

「こんなときだけ男の子扱いするのずるくない？ 男女差別だよこんなの」

「ご、ごめんなさい馬屋原先輩。やっぱり私が飛びます！ 私の自殺のことなんですし！」

あたふたと前に出てくる藤後さんに僕は苦笑いを返す。河鹿さんの言っているとおり、さすがに安全かもわからないことを後輩にさせるわけにはいかない。

「いやいいよ。河鹿さんが飛んでくれるって言うなら喜んで代わってもらうところだけど、後輩を危険な目にあわせるわけにはいかないしね」

「年下じゃない私は危険な目にあっても良いってことかしら。同級生差別だわ」

気を逸らすためにも河鹿さんに喧嘩をふっかけて軽口をギャーギャー言い続けていたが、その間も藤後さんはやっぱり心配そうな顔で僕を見ている。

「心配しなくても大丈夫よ。二階っていつてもせいぜい三メートルくらいだし、平気平気」
見かねた河鹿さんが安心させようと声をかけたが藤後さんの表情はさえない。

「でも馬屋原先輩、とっても顔色が悪いですよ？」

乾いた笑いでごまかした。正直めちゃくちゃ怖い。さっきからバスケのダンク決めた選手がバランスを崩したときくらいの高さだって自分に言い聞かせてはいるが、思っていたより高い。おかげで体育館のフロアの方を向けない。

「っていうかそろそろ飛んでくれないかしら。馬屋原の後から私たちも飛ぶつもりだし、テスト期間中とはいえ誰かが来るとも限らないから手早く済ませてしまいたいんだけど」

「鬼か河鹿さんは。もうちょっと心の準備をする時間をくれたっていいじゃないか」

「バラエティ番組でバンジージャンプを渋るシーンがあるじゃない？ 私あれ往生際が悪いから嫌いなよね。どうせ最後は飛ぶことになるのに」

「決めた、僕は今からバンジーを渋る芸能人を全面的に擁護する」

柵ががちり掴んで離さない僕と、引き剥がそうとする河鹿さんとの勝負はしばらく続いた。やがて疲れたのか河鹿さんは諦めたように「もうしょうがないわね。馬屋原、ちょっと手を貸して？」と、右手を差し出した。

僕に片手を離させるための罠なんじゃないかと警戒してなかなか手を出せなかったが、何もしないからと念押しする河鹿さんを信じて僕は右手を河鹿さんの手に重ねた。

河鹿さんは僕の手をとると手のひらの真ん中を親指でぎゅっと押しこみ、少したってから離すとい

う動作を数回くりかえした。何の儀式かと思ったが、緊張をほぐすつばを刺激しているのだという。ゆったりとしたリズムに心臓が落ち着いていく。

「ちょっとは緊張ほぐれた？」

「うん……多少は」

がちがちに強張っていた体がほぐれてきた。よし、目を固く閉じて歯を食いしばって飛べば大丈夫な気がしてきた！ 僕の決意が伝わったのだろう、河鹿さんは満面の笑みだった。

「そう、じゃあごめんね」

告げられた一言がどういう意味か問いかける暇もなく、河鹿さんは僕の手を離すと両手で力いっぱい僕の胸元を突き飛ばした。一瞬の無重力、内臓が浮いたような感覚がして、にっこりと笑う河鹿さんとあわてたような藤後さんが見えた。視界の端には見たことない角度から見たバスケのゴールがあって、血の気が引く。

「うわあああああああああ！」

気がついたら絶叫していて、マットに着地した拍子に思いっきり舌をかんだ。噛んだ部分が心臓の鼓動にあわせて、ありえない速さで脈動している。恐怖と痛みでいっぱいいな僕に向かって上から「馬鹿！ 声が大きいい！」という声が降ってきた。本当に鬼か河鹿さんは。

「誰か来るかもしれない！ 逃げるわよ！」

河鹿さんが藤後さんの手を引いて二階から駆け下り、体育館の裏口を開けても僕はマットの上にはいた。正確には動けなかったのである。

「何ぼーっとしてるのよ馬屋原！」

「ごめん、腰が抜けて動けない……助けて」

河鹿さんは呆れと怒りの入り混じったような顔をしたが、突き落としたのは自分だと思い出したのかダッシュで僕の元にやってきた。僕の片手を引っ張ってくれ、僕も自分の足に力をこめるのだがふわふわしたマットの上ではうまく立ち上がることができない。手間取っていることに気づいた藤後さんが反対側の手を引っ張ってくれてようやく立ち上がることができ、二人に引きずられるように体育館を後にした。

せっかく集まったのだしこのまま同盟の活動をしようかという話も出たのだが、僕の気分が悪そうだと藤後さんが言ってくれたこともあって今日は解散となった。河鹿さんは一応突き落としたことを反省しているのか自販機でお茶を買ってきてくれた。もう二度としないでほしい。

翌日、朝のホームルームで担任から全体に向けて注意があった。昨日の放課後、テスト期間にもかかわらず体育館でマットを引っ張り出して遊んだ者がいたらしい。誰なのかはわかっていないが、テスト期間に学内で遊ばないこと。また使ったものは必ず元の場所に戻すようにと厳命された。これは飛び降りの練習どころじゃないなと思ったのだが、河鹿さんは「ほとぼりが冷めたらまたするわよ」と闘志を燃やしていた。勘弁してくれ。

飛び降り練習が失敗してからも、同盟活動は定期的に行われていた。今日は珍しく藤後さんと二人で河鹿さんを待っていたのだが、肝心の河鹿さんは非常階段に入ってきて藤後さんを見つけるなり

「あのね、藤後さんに謝らなきゃいけないことがあるの」と神妙な顔で言った。
突然の懺悔だったが、藤後さんもだいたい河鹿さんに慣れてきたのか「なんでしょか」とすんなり返事をしていった。

「実は昨日お家に電話したんだけど、藤後さんのお母さんが出てね。私藤後さんが出るだろうって思って心の準備をできなかったから咄嗟に言葉が出なくて、焦って何も言わずに電話を切ってしまいました……完全に無言電話ですごめんなさい」

何してるんだろうこの人は……。確かに河鹿さんは予期してない出来事に対して異様に弱いところがある。それにしても何も言えなくなって電話を切るとは相当だ。悪気がないとはいえ藤後家への嫌がらせになっている。

「ああ、どおりで帰ったとき母が気味悪そうに電話を見てると思いました。別に大丈夫です！ むしろ母を怖がらせてくれてありがとうございます！」

「そ、それなら良いんだけど」

藤後さんって普段は礼儀正しくて控えめなんだけど、母親が絡んだ途端に過激な子になるんだよね……河鹿さんですら藤後さんの勢いに押されたようで謎の返答をしていたが、気を取り直したように咳ばらいをするのと定例会の開催を宣言した。

「はい、では定例会を開催します。今回の議題は、私『河鹿静佳の殺し方について』です」

てっきり藤後さん関係の議題だと思っていた僕は一瞬ぎよつとした。確かに藤後さんが死ぬときは河鹿さんを殺すという約束は出会ったその日にしていた。だがその話は初日以来出されることがな

かったので、すっかり忘れていた。藤後さんもそうだったのだろう。議題を聞いた瞬間に身をこわばらせたのがわかった。

「まず藤後さんが実行可能な殺人方法、かつ私の希望としてできるだけ苦しめないもの。その上殺人だとわかりやすいものということが条件よね。そこで私が提案するのは絞殺です」

「絞殺……つまり河鹿先輩の首を絞めるってことですよね」

藤後さんがおずおずと発言した。河鹿さんの首を絞めるところでも想像してしまったのだろうか、顔色が悪い。

「そういうことね」

「ちよつと待った。前に河鹿さん窒息死は嫌って言ってなかった？ それに首を絞めるって、中学生の女の子には難しいんじゃないの？」

僕の質問に藤後さんは不安げに河鹿さんを見つめた。河鹿さんは勇気づけるように微笑んで、「何も問題はないわ」と言った。

「自殺で窒息は嫌よ。だけど殺してもらおう立場なんだから、贅沢はいってられないわ。多少の見栄えの悪さや苦しさは我慢します。絞殺については紐を使ってもらおうと思います」

河鹿さんのイメージはこうだ。まず河鹿さんの首に紐を巻き付ける。藤後さんは河鹿さんと背中合わせになり、河鹿さんを自分の背中に乗せるようにしながら紐の両端を前に引っ張る。手で絞めるよりも力をこめることができるし、河鹿さんの体重も力としてプラスされる。これなら中学生の藤後さんでも河鹿さんを確実に殺すことが可能だろう。河鹿さんの死が現実味を帯びて迫ってくる。藤後さ

んは怯えたように両手を組んだ。

「河鹿先輩、本当にいいんですか？」

藤後さんはさすがのように河鹿さんを見て、念を押した。自分が死ぬ準備と他人を殺す準備は全くの別物だ。恨みもなく、むしろ仲が良い先輩を殺すことにためらいを覚えない方が異常だろう。

「もちろんよ。藤後さん、私を殺すことをためらわないでね？ 私はずっと誰かに殺してほしかったの。本当よ？ 藤後さんはボランティアをしてるくらいの気持ちで挑んでくれたらいいの」

藤後さんの組まれた両手を河鹿さんの両手が包んだ。優しく諭すように河鹿さんは語りかけているけれど、人を殺させようとしているのだ。藤後さんのことを考えていないわけではないが、きっと一番の目的は自分を殺してもらうことにある。そうとも知らず藤後さんは真剣に河鹿さんの言葉に耳を傾けている。まるで蜘蛛とその巣にかかった虫のように見えた。

「じゃあ、河鹿さんの殺し方がまとまったし、僕は帰るね」

立ち上がった僕を、藤後さんが思い出したように呼び止めた。

「そういうえば馬屋原先輩、何回か私の家に写真を届けてくださってるはずですよね？」

「うん、写りが良かった写真を見ずに死ぬのはもったいないかなと思って。調べたら藤後さんの家が学校からの帰り道だったし、手渡しするよりも家のポストに投函するほうが都合が良いからそうしてた。もう何回かやってるけど、もしかして届いてないの？」

もう片手じゃ足りないくらいの回数は写真を届けている。藤後さんから写真の話が一切出ないからもしかして、と思っただけなのに、全て届いていなかったのか。

「家のポストから誰かが取っていくとも考えにくいし、お母さんが持つてるんじゃないかな。聞いてみれば？」

もし母親が持っているとして、どうしてそんなことをするのだろうかと考え込む藤後さんを置いて、僕は先に帰らせてもらった。最近二人を置いて先に帰ることがあるのだが、河鹿さんはどうにもそれを怪しんでいる。口には出さないが、目がそう語っている。今までほぼ全ての同盟活動に参加してきた僕はよっぽど暇人だと思われていたらしい。間違っではないので文句は言えないが。

習慣となりつつある写真の現像を終えて、帰路につく。次回の同盟は最後まで参加しよう。そろそろ計画も大詰めだ。

藤後さんの自殺準備は着実に進んだ。身辺整理も済ませたし、河鹿さんの殺害方法だって決まった。実行場所である屋上の下見だってばっちりだ。

飛び降り練習も一度は失敗したが日を改めてした。みんな最初は身を固くして飛んでいたが、だんだん楽しくなってきた。最後の方は練習ということも忘れて飛び続けていたくらいだ。ちなみにそこに至るまで僕は何回も飛ぶことを躊躇して動けなくなってしまうのだが、いつ落ちてもいいように心の準備をして河鹿さんに押されることをくりかえしているうちに慣れた。人間慣れればどうにかなるものだと思うた。

そして今日の議題はとうとう『藤後さんの自殺決行日について』だ。

「今日までよくがんばってきたわね、藤後さん。私たちからも指摘することはありません。今のあ

なたなら間違いなく自殺を成功させることができるでしょう」

「ありがとうございます！」

藤後さんは河鹿さんの言葉を受けて顔をほころばせた。話の内容と表情にちぐはぐさを覚えることももうなくなった。たかだか三か月程度の付き合いなのに、僕も完全にこの場に馴染んでしまった。そのことが怖くもあるし、嬉しくもある。

「肝心の決行日なんですけど、明日の放課後にしようと思います」

急な決定に口を出しそうになったが、思い直した。もうすでに準備は整った。藤後さんを邪魔する筋合いは僕にはない。それに計画に参加するのは藤後さんと河鹿さんだ。

「わかったわ。改めて予定を確認するわね。決行は明日の放課後、A棟の屋上。藤後さんは私の首を絞めて殺した後、遺書を残して屋上から飛び降りる」

「僕は河鹿さんが死ぬのを見届けてから屋上を出る。僕が出たら藤後さんは屋上の扉に鍵をかける。これは自殺の邪魔が入らないようにするためでもあるし、藤後さんと河鹿さんの殺人に関係があることを明確にするためもある」

「そうですね、私もその方が良いと思います」

明日の授業が終わる次第A棟の屋上に集合、と話がまとまったところで車のエンジン音が聞こえた。この学校は道の突き当りにあり、僕らがいる非常階段から見える場所に来客用の駐車場がある。業者や先生たちの車はまた別に専用駐車場があるので、もっぱらこの駐車場を使うのは保護者だが、何か行事がある時でもなければほとんど利用はされていない。つまり今からやってくるのは学校に用

がある保護者ということだ。僕たちは無言で顔を見合わせる。今まで何度も非常階段で同盟活動をしてきたが、こんなことは初めてだった。

つい息をひそめて駐車場を見守る。やってきたのは白い軽自動車で、車から降りてきたスーツ姿の女性を見て藤後さんは「お母さんだ」と身を乗り出した。向こうから見えてはいけなさと慌てて引き戻して座らせたものの、藤後さんの視線はずっと母親を追っていた。

「あの人が藤後さんのお母さん、で間違いないのかしら」

「間違いないです。車も同じですし、見間違いないんじゃないかとありません。でもどうして学校に……」

「学校に来るってことは藤後さんに用事とか？」

来客用玄関にまっすぐ向かう藤後さんの母親を目で追いながら小さく話していたが、藤後さんは焦れたように立ち上がって「すみません、ちょっと声かけてきます」と非常階段を下っていった。

玄関の手前で藤後さんは母親に声をかけたらしい。母親が振り向いて藤後さんと何事か話し出した。距離があるので話している内容や表情まではわからないが、少しして藤後さんの「はぁ!？」という驚いたような大声が聞こえてきた。「やめてよみつともない!」だとか「誤解だっって言ってるでしょう!」といった言葉を藤後さんがかけて、玄関へ進もうとする母親の手を掴んで引き止めている。どうやら母親が学校へ行くのを阻止しようとしているのはらしい。

二人はしばらく言い合っていたが、今度は母親が藤後さんの手を引いて、玄関ではなく駐車場の方へ歩き出した。藤後さんは「自分で歩けるってば!」と手を振り払おうとしていたが聞き入れてもらえず、結局スリッパのままかばんもなしに車の後部座席に押し込められて、行ってしまった。

僕は藤後さんに乗せた車を見送って河鹿さんに視線を移した。河鹿さんは突然の出来事に啞然としているようだったが、僕の視線を受けて「……どうする?」とぼつりと言った。

「どうするって言ったってどうしようもないでしょ。僕たちが藤後さんの家庭の事情に口出しなんてできないよ」

「……そうね。藤後さんお母さんに連れて行かれるのは嫌そうだったけど抵抗はしてなかったし、たぶん大丈夫よね。うん、明日藤後さんが来るのを待ちましょう」

河鹿さん自分に言い聞かせるように言葉をつむいだ。心配そうな表情は崩れないが、それを振り払うようにして河鹿さんは立ち上がる。僕はその背に声をかけた。

「ねえ、河鹿さん。一つ賭けをしない?」

「賭け?」

「そう、明日藤後さんが屋上にやってきて自殺するかどうか。僕は自殺しない方に賭ける」

河鹿さんが目を見開いて僕を振り返る。突然変なことを言い出した僕をいぶかしんでいるようだ。

「何言ってるのよ。長い時間をかけて準備してきた。とっくに心の準備も覚悟もできてるはずよ。今更やめるなんて、ないんじゃないかしら」

「そうかな。僕は正直最初に藤後さんの話を聞いたときから彼女が自殺できるかどうか怪しいものだと思っただけ」

「そんなことも言ってたわね。そもそもどうしてそう思うの?」

「藤後さんは最初からずっと母親を後悔させるために自殺するって言ってるけど、自分が死んだら相

手が後悔してくれるって結構思い込みじゃない？ 僕、家族間での反応はよくわからなかったから、いじめっ子といじめられっ子で考えたんだけど、いじめられっ子が自殺してもいじめっ子って後悔するかな？ もちろん後悔する子はいるだろうけど後悔しない子だっていると思うんだよね、意外とそれなのにああも後悔するって言いきれたのはある意味母親からの愛を信じてるからじゃないかな」

「……そうね、同盟に仮入部したてのころだったら私もそう思ってたわ。だけど、人は変わるのよ。今まで藤後さんと積み重ねてきた時間を私は信じる。だから私は藤後さんが私を殺して自殺する方に賭ける」

僕と河鹿さんは真正面から向き合った。僕は今まで何度もお互いの意見を否定してきた。対立することも多かった。もしかしたらこれが最後になるかもしれないけれど、僕は最後までこれで良い。そう思う。

「そうだ、もし馬屋原が勝ったらどうするの？」

「僕が勝ったら河鹿さんに聞いてほしい話があるんだ。河鹿さんが勝ったら僕は何でも一つ言うことを聞く」

もっと無茶な要求をされると思っていたのだろう。河鹿さんは僕の小さな願いに拍子抜けしたような顔をしたが、僕が真剣だということに気がついて顔を引き締めた。

「わかった、それでいいわ。私が勝ったら……そうね、死後の携帯電話の始末でも頼もうかしら」

そう、もしも河鹿さんが勝ったら河鹿さんはすぐに藤後さんに殺されることになる。河鹿さんはいくまで軽く、そう願ったけれど、僕の上に重みを持つてのしかかってくるようだった。

「何にせよ今私たちにできることは何もないわ。今日はもう解散しましょう」

明日の放課後A棟の屋上で、ともう一度くりかえして僕たちは別れた。藤後さんが明日死ぬにしろ、死なないにしろ、僕らにとって明日が運命の分かれ道になる。

僕たちが緊張しながらA棟屋上の扉を開けたとき、藤後さんはすでにいて、転落防止柵にもたれながら空を見ていた。

「藤後さん！」

いてくれたことにほっとした様子で河鹿さんが声をかける。振り向いた藤後さんを見て僕ははっとした。彼女の顔つきは今まで見たこともないくらい穏やかだった。

「昨日は突然帰ってしまっすみませんでした」

藤後さんは僕らの方に歩み寄ると丁寧にお辞儀をした。いつも通り、礼儀正しい藤後さんだ。しかしその声もかつてないほど優しい。河鹿さんは藤後さんの変化には触れずに続けて声をかけた。

「別にいいのよ。それで、昨日あれからどうなったの？」

「母とお互いに思ってること全部ぶちまけて話し合ってきました。どうやら母は先輩たちのことをストーリーだと勘違いしてたみたいです」

「ス、ストーリー！？」

「はい、家に無言電話がかかってきたり、ポストに写真が入ってたり、家にいるときに外から視線を感じたりしたことがあったのでそう思ったと言っていました」

藤後さんの言葉を聞いて僕と河鹿さんは顔を見合わせた。ぼつちり思い当たることがあって河鹿さんは顔が青い。僕は笑いだしそうな顔を引き締めてまじめな顔を作った。

「……無言電話は私、だね」

「ポストに写真入れたのは僕だし」

「ですよね。視線はたぶん神経質になってた母の勘違いです」

そして昨日、僕らのストーカー行為に耐え切れなくなった藤後さんの母親はついに動くことを決めたそうだ。写真の背景が学校の校内だったことからストーカーは同じ学校の生徒だろうと考え、相談するために学校へやってきた。それを僕たちが目撃し、藤後さんは母親に何事かと声をかけに行った。「ちよつと母の話を聞いたらすぐにそのストーカーが先輩たちのことだつてわかつたので必死に止めて、先輩たちも見ていたと思いますですが家に連れて帰られました」

家に着いて、そのストーカーというのは誤解で、仲の良い先輩たちがしたことなのだと話しても母親は一向に聞き入れてくれなかったという。あんなことをする先輩が良い人なわけがない。ストーカーじゃなければおかしな人にとぶらかされているのだと譲らなかつた。高校受験は確定事項だ、あんな学校入学させなければよかつた。その一言で藤後さんもキレた。

「母が始めさせた習い事のせいで中学までろくに友達ができなかつたこと、そんな私と仲良くしてくれたのが今の学校の友達で、今人生で一番楽しく過ごしていること。だから絶対にこのままこの学校に進学するし、そのためなら家を出ることも考えるつて言いきました」

そうしたら母親は「危ない目にあつたらどうするのよ」と弱々しくつぶやいて泣き出したのだそう

だ。今まで言い争いをして決して泣かなかつた母親の涙と、藤後さん自身を心配してくれている言葉に藤後さんは動揺した。

何も言ひ出せない藤後さんに母親は藤後さんへの思いを切々と語り出した。自分はやりたいことができなくて、辛い思いをしてきた。自分の娘にはそんな思いをさせないように、やれることは全部やらせてあげた。それが娘のためだと信じていた。ただいつからか娘を通して自分の幼少期をやり直しているような気持ちになり、自分のやりたかつたことをしているのに楽しそうでなく、望んでいるような結果も出さない娘にイライラしてしまうことが増えた。

そのうちに家族仲がぎくしゃくとしだし、離婚。両親もすでに他界している自分にはもう娘しかいないと考えると、ますます娘への執着は強まっていった。娘には絶対に幸せになつてもらわなければならぬ。高校受験だつてそう思つて進めた。しかし娘はそれに猛反発した。今まで反抗らしい反抗をしてこなかつた娘からの突然の反抗に戸惑いながら、どうして今更と思つた。娘のためを思つてやつてきた今までのことも全部否定されたような気がして、ろくに話も聞かずに要求を突っぱねた。家の中は冷戦状態になつてしまつた。

そんなときに娘の様子がおかしくなつた。今までより帰宅の時間が遅くなるが増え、スカートにしわや砂の汚れがついていることが多くなつた。妙に明るい顔つきで帰つてきたと思えば、何日かしたら今度は思いつめたような顔をしている。部活や友達との間で何か起こっているのかとさりげなく聞いてみても、いつもと同じ返事しか返つてこない。違和感を覚えたところ、娘へのストーカー行為らしきことが始まつた。最初は盗撮写真、次に無言電話、とうとう視線まで感じるようになってきた。

このままではいずれ娘に取り返しのかない何かが起こる。もしも娘が死んでしまったりしたら。そう考えると背筋がぞっとした。一度考え始めると悪いことばかり想像してしまつて、自分が仕事をしている今この瞬間娘に危険が迫っているんじゃないかと居ても立ってもいられなくなり、仕事が終つてすぐ学校へ車を飛ばしてやつてきた。

母親の心情を聞かされて藤後さんは茫然とした。自分のちょっとした感情の変化すら気づいているか怪しいと思つていた母親が、自分の様子がおかしいことに気づいていてくれた。そのことに驚きながらも嬉しいと思つて、そのことにも混乱した。母親に対する感情がぐちゃぐちゃになつて、自分でもわからない。だけど、一つだけ母親に問いかけた。

「お母さんは私のこと、好き？」

母親は即座にもちろんだと答えた。世界中の誰より愛しくて、自分の命より大切だ。その言葉を聞いた途端、藤後さんの胸の内にあつた母親へのドロドロした思いが消えていった。そこでようやく藤後さんは母親を心の底から憎んでいたのではなく、ただ自分を見て、愛しているとやつてほしかつただけなのだと思つた。

藤後さんは母親の手を握つて宥めながら、お互いの気持ちを伝えあつたのだという。

「私は母の言う通りに生きてきて、逆らつたり、母の望み通りにならなかつたりすると怒られることが多かつたです。それで母はきつと私という個人じゃなくて思い通りに動く人形が欲しいんじゃないかと思つてました。私の意思なんていらなくて、自分の思い通りになる人なら誰でもいいんじゃないか。でも違いました。私が思つてたよりずっと、母は私のことを愛していてくれました。自分の命よりも大切だつて、そう言つたんですよ？」

「それで話し合つた結果、ちよつとずつ歩み寄ろうつてことで決着が着きました。私はこのままこの高校に進学していいし、習い事も本当にやりたいものだけでいいことになりました。ただ母はストーカー行為のことがまだ引かかつてるみたいで、できれば先輩方と付き合うのはやめてほしいとお願ひされました。あ、もちろん母に他力本願自殺志願者同盟のことは言つてないので大丈夫です。困つているところを助けてもらつて、良くしてくれている先輩ということで通しました」

そこで藤後さんは言葉を切ると、しっかりと僕と河鹿さんの両方と目を合わせた。生き生きとした目の眩しさに河鹿さんが耐えきれないように視線を外す。

「私が自殺しようと思つたのは他校への高校進学を強要されたことがきっかけで、あとは母への当てつけのためでした。でも今の私は友達と一緒に進学できることになりました。母からも愛されていたことがわかつて、もうちよつと生きていたいと思えるようになったんです。こうなつて初めてわかりました。私は何もなくても死にたいと思う先輩たちの考え方が理解できません。だからこれは母のお願いに関係なく、自分で決めたことです」

もう次の言葉は予想出来ている。なんなら屋上にやつてきたときからずっと。藤後さんの後ろに見える空は夏の澄み渡つた青色をしていた。

「同盟は今日限りで抜けさせていただきます。ごめんなさい」

僕が思つていた通りの言葉を言つて、藤後さんは深く頭を下げた。河鹿さんだつて今日の藤後さん

を見た瞬間から、どういう結末になるかはわかっていたはずだ。それでも信じていた分ショックが大きいのだろう。口を開いても声は出ていなかった。頭を下げたまま藤後さんが続ける。

「特に河鹿先輩。私が自殺するときには殺してあげますって約束までしたのに、約束を守れなくてごめんさい」

「……気にしないで。殺してもらえなくなったのはそりゃあ残念だけど、藤後さんが今幸せで死にたいって思わなくなったことが純粹に嬉しくもあるから」

河鹿さんは絞り出すようにそう言って、力なく笑った。藤後さんの言葉をそのまま受け入れて、「ありがとうございます」と嬉しそうにしていた。

「それじゃあ、今までありがとうございます。失礼します」

最後にもう一度頭を下げてから屋上を去ろうとする藤後さんに、僕は質問を投げかけた。

「もう、死にたいとは思わない？」

藤後さんは少し目を瞬かせて、「はい！」と元氣よく答えて去っていった。初対面のときからは考えられないような流刺さで、少し突いただけで爆発してしまいそうだったあの藤後さんはどこにもいなかった。

ほっとした気もするが、取り残されたような気もした。それはたぶん、河鹿さんの方が感じていることだろう。

「……やっぱり死にたいって思うにはそれなりの理由があるのね。その原因が取り除かれたら彼女は

死にたくないと思う普通の子に戻ってしまった。結果的に私たちは人を救ったことになるのかもしれないけど、全然嬉しくないわ」

閉じた扉を見て河鹿さんはため息交じりにそう吐き出した。その口調があまりにも沈んでいて、「残念そうだね」と声をかけた。

「そうね、残念じゃないと言えば嘘になるわ。いえ、別に彼女が死ねばよかったなんて思っていないのよ？ 死ななくてよかったって気持ちにはちゃんとある。でも彼女は人として正常だった。辛いことがあると死にたくなくて、嬉しかったら生きたいと思う。そんな普通の人だった。でも、それじゃあ何もなくても死にたくてたまらない私たちは何なの？ ……自分はおかしいんだって再認識しちゃった。馬屋原がいてくれてよかった。私一人だったら悲しすぎるもん」

そう言って河鹿さんは僕に笑いかけた。全幅の信頼を感じるような、心をさらけかけた表情だった。僕は今が絶好のチャンスだということを悟った。今なら河鹿さんを、深く深く傷つけることができる。

「じゃあ賭けは僕の勝ちってことで、早速だけど聞いてほしいことがあるんだ」

「はいはい、敗者の私はどんな話だって聞きますよ。いつでもどうぞ」

話しながら転落防止柵へ向かう。校舎は違うけれど、あの日河鹿さんと出会ったのと同じ位置に足を進めると、スリッパのまま柵を越えた。

「ちよっ、馬屋原!？」

焦る河鹿さんを振り向いて、僕は何事もないように会話を続ける。

「覚えてる？ 僕と河鹿さんが初めてまともに会話した日のこと。ここじゃなくてC棟だったけど、僕がこうやって屋上の縁に立ってたところに河鹿さんがやってきてさ」

「もちろん覚えてるわよ」

僕の話を守るように河鹿さんは返事をした。柵の内側に引つ張り込みたいが、もし僕がバランスを崩して落ちたらどうしようとか考えているんだろう。胸の高さまで上げた手のひらは迷うように緩く閉じたり開いたりを繰り返している。僕に死んでほしくないのだろうか。いや、単に教師や警察からの事情聴取を受けることになるのが嫌なだけかもしれない。

「柵の向こう側にいたところまで再現しなくていいよ。危ないし、人に見られるとやばいって。ね、早くこっちに戻ってよ」

前者だったらいいのになあと思いながら、僕は不安げな河鹿さんに笑顔でこう言った。

「あの日、僕は別に死のうとしてたわけじゃないんだ」

「……は？」

「あの日僕はね、高所恐怖症を克服しようとしていたんだよ」

何を言われたか理解が追いついていないのだろう。すべての動きをびたりと止めて呆然としている河鹿さんが滑稽でならない。

「恥ずかしながら僕は高いところが苦手なんだ。それなのに今年の修学旅行先は東京で、全員でスカイツリーに登るって言うじゃないか。絶望したよ。それで僕は高所恐怖症を克服するために屋上に上ったんだ。高いところの景色を見ればそのうち慣れて怖くなくなるかもと思って。実際藤後さん

の自殺のための飛び降り練習とかしてるうちに高いところに対する恐怖心が消えてきて、今は高所恐怖症を克服できたみたい」

「そんな、ことのため？」

「僕にとってはそんなことじゃないよ。あの日の態度、覚えてるでしょ？ 無様に足が震えて何かに掴まらないと立っていられないくらいで、唇から色がなくなるくらい顔色は蒼白で、声だって震えてたはずだよ。体育館の二階から飛んだときは腰が抜けたし、その後気分が悪くなった」

「だ、だからって普通柵の外側に出たりする！？ 馬鹿じゃないの？」

「あんな惨めな姿、クラスメイトには絶対に見せたくなかった。醜態さらすくらいなら死んだほうがマシだ、ってちょっとだけ考えてた。だからあんな無茶が出来たんだと思う」

「あの日『怖いからここにいる』だとか言ってたのは？」

「高いところが怖いから克服しようと思ってここにいた。その癖途中で怖くなってそこから動けなくなってた」

「スリッパが揃えて置いてあったのは？」

「もし柵の向こう側で脱げたら危ないじゃないか」

何かの間違いじゃないか、僕がからかっているんじゃないかという一縷の望みをかけて問いかけてくる河鹿さんを僕はことごとく拒絶した。河鹿さんが出会ったあの日の僕は河鹿さんが思い描いていたような自殺志願者などではなく、ただの高所恐怖症のクラスメイトだったことを突きつけるように。河鹿さんの顔が泣きそうに歪む。

「何で……どうして最初に私の勘違いだっって言ってくれなかったの」

「否定しちゃかわいそうだと思ったから」

「かわいそう……？」

「うん、かわいそう。河鹿さんては自殺志願者に会えたって喜びで目をキラキラさせて、テンション上がってたし、自分の話をするときくらいから口調だって変わってたじゃん？ 普段のしゃべり方じゃなくて、まるでアニメとか小説の登場人物みたいな口調になってさ。待ち望んでた非日常を楽しんでます、みたいな雰囲気だったから、そんな河鹿さんを否定するなんて僕にはできなかったよ。あんまりにも憐れで」

僕のこの言葉を聞いた途端、河鹿さんの顔から表情が消えた。からっぽな目を地面に向けて僕に問いかける。

「全部全部私の勘違いだったの？」

「そうだね」

「馬屋原も、私を裏切るの？」

「裏切ってなんかないよ。もともと僕は河鹿さんの側にいたつもりなんてない」

「……そう」

河鹿さんはまばたきを一つして、顔をこちらに向けた。その瞳は憎悪で染まっていた。

「あんたなんて、死んじゃえ」

聞いたこともないような低く、暗い声でそう言って、河鹿さんは僕の胸元へ手を伸ばした。何度も

三人で繰り返してきた飛び降り練習と同じ。

そうだよ。その手で、僕を殺して。

目を閉じて僕の胸を押す衝撃を待つけれど、いつまでたっても何も起こらない。そっと目を開けると、河鹿さんの手は僕に触れる二、三センチ手前で震えていた。

「もう一步踏み出すだけで、望み通り僕は死ぬよ」

「……きかない」

小さくつぶやかれた言葉を聞き返そうと顔を近づけたとき、「できるわけないじゃない！ 馬鹿じゃないの！！」と河鹿さんの感情が爆発した。至近距離で大声を聞いてしまっただけで耳がぐわんぐわんする。

「私は死にたいだけなのに、どうして人を殺さなきゃなんないの！」

もっともな言い分だ。だから怒りに我を忘れているうちに、衝動的に殺してもらおうと思っていたのに。僕が思っていたよりずっと河鹿さんは冷静な人だったみたいだ。

計画は失敗だろうなと思いつつ、僕はあきらめ悪く言葉を続ける。

「河鹿さんの心を踏みにじった僕が憎いんじゃないの」

「憎いに決まってるでしょ！ あんたなんか大っ嫌い」

河鹿さんは僕をきつく睨みつけてきたけれど、その目にはちゃんと理性がある。

「でも、もしここであんたを突き落とすとしても私はすっきりしない。それどころか初めて見る死体がショッキングすぎてトラウマになる可能性の方が高いと思うわ。あんたが私のトラウマになるなんて

腹が立って腹が立って死にそうよ。それに人なんて殺したら家族や友達がどんな目に遭うか、想像するだけで恐ろしいわよ。しかも傍目には私たち接点なんてないし、あんたは自殺志願者じゃなかったんだから自殺幫助だって通らない。私はただの殺人犯になる」

「河鹿さんも僕の後に続いて飛び降りちゃえば真相なんて誰にもわからないよ」
「あんたと一緒に死ぬなんて死んでもごめんだ！」

ひどく嫌われてしまったものだ。わざと怒らせたとはいえ河鹿さんのきつい言葉に少しばかり心が痛む。しかし「一緒に死ぬなんて死んでもごめん」って何だ。勢いに思わず笑ってしまうと「何笑ってんのよ！」と怒られた。本当に河鹿さんはおもしろい。計画は失敗してしまっただけれど、おもしろいものが見られたので満足だ。

「ごめんね。さっきの話、半分は嘘だよ」

僕の告白に河鹿さんはまた動きを止める。怒りと安堵が入り混じって複雑な表情になっている。河鹿さんは混乱しながらも「どこからどこまでが嘘で、何が本当？」と聞いた。

さて、種明かしをしてきちんと謝ろう。河鹿さんは優しい人だし、僕らの考え方は良く似ている。だからきつと僕を許してくれる。

「河鹿さんがかわいそうで、自殺志願者のふりをしてた。それは本当。だけどそれは最初だけなんだ。河鹿さんの話を聞いているうちに、僕も死にたいと思うようになった」

僕には別に生きる目標だとか将来の夢だとか、そんなたいそうなものはなかった。ただ一日一日をなんとなく過ごして、楽しくて楽な方へと流されるように日々を送っていた。ずっとこんな調子で生

きて、適当なところで死ぬのだろうと思っっている普通のどこにでもいる高校生だった。だけど、あの日河鹿さんに出会ってしまった。

最初はただ否定するのがかわいそうだと思った。学年でも目立たないタイプの河鹿さんがめぐり合った理想のシチュエーションに浮かれて、普段とはまったく違う顔を見せている。勘違いしていると指摘できる雰囲気じゃなかったし、意図せず見えた河鹿さんの一面に興味を引かれて適当に話を合わせていた。だけど聞いているうちに河鹿さんの熱量に惹かれて、同じ景色を見たいと思った。

河鹿さんの考えを理解したいと思ううちに、いつの間にか僕も他力本願自殺志願者になってしまったのだ。

河鹿さんの意見に同意を示すと、河鹿さんは予想通りに喜んだ。同盟を結成することになるとは思っていなかったが、定期的に河鹿さんと会ってくだらないやりとりをするのは楽しかった。河鹿さんがこんな話をするのは僕だけで、僕は河鹿さんの友達とも家族とも違う特別なんだと思うと胸が高鳴った。

そんなある日、僕らは藤後さんと出会う。

「藤後さんと出会って、話を聞いて、自分の存在を刻み付けるために死ぬって考えが僕にはまったくなかったから、そんな死に方もあるんだなって新鮮だった。それで話を聞いているうちに、僕も河鹿さんに自分の存在を刻み付けたいって思ったんだよね」

藤後さんと出会った日の河鹿さんときたら、僕にかけた言葉とまったく同じことを藤後さんに言うんだもの。河鹿さんにとって今の僕は別に替えのきく人間なんだと思知らされてしまった。僕に

とって河鹿さんの代わりになるような人はいないのに。同じだけの思いを返してもらえないことが悔しくて、せめて忘れられない人になってやろうと思った。

「それでね、僕は死ぬなら河鹿さんに殺されたいって思うようになったんだよね。前に『人に殺してもらうためにはどうすればいいか』って議題を話したことあったでしょ。そのときに信頼してた人に裏切られたら殺したくなるかもって言ってたから、嘘をついてわざと怒らせるような言葉をぶつけて殺してもらおうとしたんだ。ごめんさい」

「……まだ、私に嘘ついてることないの？ 本当にこれで全部？」

てっきり安心した顔をするかと思っただのに、河鹿さんは僕の告白が終わっても依然青ざめたままだった。心なし体を後ろに引いて、でも一歩下がらないように踏ん張りながら僕の目を覗き込んだ。河鹿さんは何を望んでいるのだろう。さらなる嘘の告白だろうか。確かに僕はこれ以外にも嘘をついていた。嘘を全て告白しないと河鹿さんは許してくれないのかもしれない。

「ああ、藤後さんのことを言ってるのかな」

「藤後さん……？ どうしてここで藤後さんの名前が出てくるの？」

目を丸くする河鹿さんに僕も驚く。同盟活動中に早く帰るたび、河鹿さんが怪しんでいたから、てっきりばれたのかと思っただのに。じゃあ、河鹿さんは僕に何の告白をしてほしかったのだろう。

言ってしまったからには今更隠すわけにもいかず、僕は不安そうな河鹿さんに僕が秘密にしていたことを話すことにした。

「藤後さんのお母さん、藤後さんがストーカー被害にあってるって言ってたでしょ？」

「そう、ね。でもそれは私たちのせいでもあるけど、お母さんの勘違いだったんじゃないか、違うの？」

「うん。無言電話の最初の一回は河鹿さんだったけど、その後は僕が意図的に何回かかけてた。写真をポストに入れるのだって、わざと藤後さんしか写ってなくて視線がこっちを向いてない、盗撮っぽいのはっきり送ってた。写真を入れるついでお家の周りを一周して様子を観察したことも何回かあったから視線を感じたんだろうね。同盟活動中たまに早く帰ってたのはこういうことをしてたからなんだ。あのときはさぼってごめんね」

藤後親子へストーカー行為をしようと思いついたのは、本当に偶然だったのだ。河鹿さんが写真を撮っても良いとふざけていったときにひらめいた。もしも藤後さんの盗撮写真らしきものが消印もなしに自宅ポストに投函されているのを母親が発見したらどう思うだろう。何が起きるかはわからないが、確実に何か起こるはずだ。写真を撮って置いて死後に投函する、という名目を藤後さんは思いのほか気に入ってくれて、僕は同盟活動中自由に写真を撮る権利を手に入れた。もともと写真だけでしばらく続けてみるつもりだったが、河鹿さんが一度無言電話をかけてしまったと聞いてからは無言電話もかけるようにした。かけるたびに母親が怯えていくのがわかったが、河鹿さんが無言電話をかけてしまったと謝ったときの藤後さんの反応からそこまで罪悪感は覚えなかった。ついでにポストに写真を入れるとき家の周りを一周してみたり、カーテンの隙間があつたら覗き込んでみたりもしていたのだが、母親が気づいていたなんて今日話を聞くまで知らなかった。徒労に終わると思っていたものが報われていたことが予想外に嬉しくて、聞いたときは笑ってしまいそうになった。

こんなことをくりかえしていたので、母親がストーカーだと思うのも当然だ。藤後さんの認識と母親の認識にずれがあるから、いくら藤後さんが勘違いだと主張したところで信じてもらえなかったのも無理はない。藤後親子には僕の仕業だということがばれるかと思っていたのだが、藤後さんがうまくお母さんを宥めてくれたみたいで良かった。

「なんで、どうして、そんなことしたの？」

「こんな風に火種をまいてたらそのうちお母さんが爆発して二人で話し合うかなって。ほら、ちまちました喧嘩を何回もするくらいなら全部ぶち壊すくらいのでっかい喧嘩があった方が進展するんじゃないかって思ったんだ。言ってみれば親切心だよ」

「藤後さんのこと、そんなに心配してたってこと？」

「まあ、一応知り合いになったんだしそこそこ心配してた。でもそれはあくまで知り合いに向けるようなもので、やっぱり一番は藤後さんに河鹿さんを殺させないためかな。だって河鹿さんが藤後さんに殺されたら、僕のことなんてどうでもいいまま死ぬでしょ。人生の終わりに出会ってちょっと仲良くなった人、くらいで一番は藤後さんだ。だって自分を殺してくれる人なんだから。そんなのは嫌だった。それなら藤後さんをどうにか排除して、僕のことを刻み付けるまで河鹿さんに生きていてもらうって決めた。だから藤後親子にちょっかいをかけてた。僕が嘘ついたり隠してたりしたことはこれで全部。いろいろあったけど、結局僕と河鹿さんの二人だけのところに戻っただけだね」

僕が晴れやかにそう言ったら、河鹿さんは信じられないものを見る目をして一歩後ずさった。

「何が元通りよ。今の告白、悪ふざけだって言ってほしかった。全部本当なら、元のようになんか戻

れっこない。あんた、おかしい……気持ち悪いよ、そんなの」

心底理解できない、というような表情をして河鹿さんがまた一歩下がる。僕は河鹿さんの反応を見て、胸元から黒くてドロドロした思いがあふれ出したような気がした。

「河鹿さんが、それ言うんだ。散々僕に自分の意見を言って、受け入れられて浮かれてた河鹿さんが僕の意見を否定する権利なんかあるの？」

否定する権利なんてあるはずもない。多少強引なことはしたが河鹿さんや藤後さんにとって害になることは起こっていない。藤後さんの母親には迷惑をかけたが、丸く収まったからそれで良いだろう。僕は本当に悪いことなんかしていない。咎められることなんてない。だから河鹿さんが僕を否定するのは、河鹿さんの感じ方の問題だ。感じ方なんてちょっと意識すれば変えられる。僕はそうやって河鹿さんを受け入れたんだから、河鹿さんも僕を受け入れるべきじゃないのか。否定するなんて、許さない。

「人に自分を肯定してもらおうのって嬉しいよね。河鹿さんみたいなちょっと変わった残念な人だとなおさら気持ちよかったよね。口にださなくたって、よくわかるよ。僕と河鹿さんはよく似てるし、僕は河鹿さんをずっと見てきたから。僕もそういう風に自分を肯定してほしいって思っただけなんだよ。それはいけないことなの？ 河鹿さんにとつて受け入れがたいことなの？ 僕は河鹿さんに謝るべきところは謝ったし、隠し事や嘘だつてもうない。自分なりに誠実な対応をしたつもりだよ。それなのにどうして僕を拒絶するの？」

河鹿さんの口ははくはくと動いているけれど、言葉は出てこない。僕はそんな反応にまた腹が立つ。

しかし翌日の朝、予想に反して河鹿さんはわざわざ僕のクラスまでやってきた。人目のあるところで僕に話しかけたことなんてなかったのに「ちょっと話があるんだけど、いい？」と直接話しかけたので驚いた。

さらにいつもの非常階段について開口一番に謝ってきたものだからなおさら驚いた。

「常識的に考えて謝るのは僕の方じゃない？」

「そうかもしれない。でも昨日家に帰ってからよく考えたの」

河鹿さんがいつものように階段に腰掛けるから、僕はおずおずとその隣に座った。最初は僕の位置で、途中から藤後さんの位置になったその場所はひどく久しぶりに感じた。

「誰でも自分の中にあの人はこんな人であってほしいっていう思いがあるものよ。親は子供を愛するべきだし、先生は生徒を導くべきだし、総理大臣は国民のことを第一に考えるべき、みたいな考え。

私は馬屋原のそういう思いを裏切った……ってことなんでしょう？ だったら悪いことしちゃったって思ったの。私だったら激怒するもの。というかしたもののね、馬屋原に対して」

河鹿さんはそう言って苦笑した。昨日のことを思い返しているのだろう。河鹿さんは僕を突き落としかけたてのひらに視線を落とした。

「馬屋原と出会って、同盟を結成してから毎日楽しかった。同盟のときになると本当の私、みたいなものになったような気がした。今まで誰にも話せなかった自殺についての話を聞いてもらえて、しかも否定されないんだもの。とても楽しかったけど、私は話すことに夢中になって、馬屋原の気持ちを

ぜんぜん考えてなかったって昨日初めて気がついたの。私は馬屋原のことを理解したような顔をして、自分の理想を押し付けていた。だからその点に関しては反省した。ごめん」

昨日殺し合いに発展しかけたなんて思えないような穏やかさだった。河鹿さんは昨日の取り乱しっぷりが嘘のように落ち着いている。そんな河鹿さんに謝られたら、僕は許さないわけにいかない。一度は幻滅したが、やっぱり河鹿さんは僕の憧れた人だ。

「ううん、僕も悪かったからもういいよ。それで、河鹿さんはこれからどうするの？」

河鹿さんが僕に謝ってきていわゆる仲直りをしようと思ったのは、今までの関係に戻るためだろう。つまり同盟の継続だ。僕は同盟の、死に向き合っているなんて思えない生ぬるさが好きだった。だからそう提案されれば断る理由はない。それに今回は失敗したけれど、僕はまだ河鹿さんに殺してもらうことを諦めていない。もつといい計画を立ててそのうち必ず殺してもらおう。

ただ、昨日河鹿さんは僕に首を絞められて死にたくないと言った。河鹿さん自身があの言葉を受け入れてしまっているなら、今までどおりの活動なんてとても続けられないだろう。

「馬屋原さえよければ、これからも私と同盟を続けてほしい」

「河鹿さん昨日、死ぬるチャンスだったけど死にたくないって言ったよね。他力本願自殺志願者じゃなくなったってことじゃないの？ それでも同盟を続けるつもり？」

目を見て問いかけると河鹿さんは顔をしかめた。

「……昨日のあれは、突然だったからだって信じたいわ。ほら、馬屋原も心の準備なしに体育館の二階から突き落とされたら悲鳴を上げたでしょ？ それと同じようなものだと思うのよね」

河鹿さんには即刻その記憶を消し去ってもらいたい。それを引き合いに出されると僕は何も言えない。

「だから、今度は心の準備をしつかりして、馬屋原が私を殺すように仕向けるわ！」

「はっ？」

「馬屋原に自分の理想を押し付けていたことは反省したわ。でもそれと昨日馬屋原から殺されかけたこととは話は別よ。それに関してはまだ怒ってます。馬屋原のこのひらの上で踊らされて、泣かされた悔しさで昨日はよく眠れなかつたくらいよ。だから、今度は私の番よ。絶対気づかれないように罠にはめて私を殺させてやるから！ 首洗って待ってなさい！」

まさかそうくるとは思わなかつた。びしっと人差し指を突きつけてくる河鹿さんに、思わず笑みがこぼれた。いつだって河鹿さんは僕の想像を飛び越える。そういうところが好きなのだ。

でも河鹿さんの宣言通りにはいかせない。今度だって必ず僕が勝つ。

「……そう簡単に罠にはまる気ないよ。次こそ僕が河鹿さんに殺してもらおう。だから河鹿さんこそ覚悟しといてよね」

僕の言葉を受けて不敵に笑う河鹿さんへ、僕は手を差し出した。

「これからもよろしくね、河鹿さん」

「こちらこそ。よろしく頼むわ、馬屋原」

僕は微笑んで握手を交わした。いつ終わるとも知れない僕らの最後の勝負が始まった。

